未来を築け

被災地に学ぶ、被災した子ども達とともに

～災害文化の醸成・継承・伝播～

岩手大学地域防災研究センター

第6回地域防災フォーラム

2013年11月22日(金)13:00～15:45

岩手大学工学部キャンパス内 復興祈念銀河ホール

講　演　録

岩手大学
地域防災研究センター

未来を築け

被災地に学ぶ、被災した子ども達とともに

～災害文化の醸成・継承・伝播～

講　演　録

岩手大学
地域防災研究センター

目次

開会挨拶および趣旨説明 ……1

岩手大学地域防災研究センター副センター長　　越谷　信（工学部准教授）
研究代表　　山崎　友子（教育学部教授）

第 1 部 講演会

紙しばい『つなみ』 ……11

田畑　ヨシ（2012年 防災担当大臣表彰受賞、2013年 岩手日報文化賞（社会部門）受賞）

宮古市立田老第一中学校生徒の語り部活動
―田老第一中学校の現状と語り部活動について― ……17

菅井　雅之（田老第一中学校長）

―３年生による語り部活動―
学校紹介、田老の町の紹介、体験談、田老の現状報告、校歌 ……19

田老第一中学校３年生

講演「心のケアと子どもたち」
東日本大震災の被災地宮城県名取市での支援活動を踏まえて ……32

宗貞　研（公益社団法人日本国際民間協力会　ＮＩＣＣＯ）

第 2 部 討論会

パネルディスカッション「復興の鍵は子ども達にある」 ……55

パネリスト：葉養　正明（埼玉学園大学教授、震災時文部科学省国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長）
佐々木　力也（花巻市立八幡小学校長、震災時田老第一中学校長）
宗貞　研（NICCO、看護師、心理カウンセラー）
村井　旬（震災時田老第一中学校生徒会長、現在盛岡第三高等学校2年生）
コーディネーター：山崎　憲治（元岩手大学教授）
コメント：荒谷　栄子（宮古市教育委員会教育委員、震災時田老第三小中学校長）

特別メッセージ ―2.5人称で語り、１人称で築く― ……80
柳田　邦男（作家）
代読：越野　修三（岩手大学地域防災研究センター教授）

宣言 ―未来を築く被災地の子どもの声― ……82
村井　旬（前掲）
英訳：James Hall（教育学部准教授）

閉会挨拶……84
西館　数芽（工学部教授）

開会挨拶および趣旨説明

岩手大学地域防災研究センター副センター長
越谷 信（工学部准教授）

研究代表　山崎 友子（教育学部教授）

司会：山崎友子（前掲）

【山崎友子】　皆さま、こんにちは。「第６回地域防災フォーラム」を開催いたします。私は本日、司会を務めさせていただきます岩手大学地域防災研究センター兼務教員を務めております山崎と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

最初に、本センター副センター長の越谷より、開会のごあいさつを申し上げます。

【越谷　信】　ご紹介ありがとうございます。開会のごあいさつを申し上げます前に、2011年３月11日大震災の発災以来２年８カ月が経ちました。被災された、亡くなられた方、行方不明者の方に、黙とうを捧げたいと存じます。恐縮ではありますが、ご起立のうえ、黙とうのご協力をよろしくお願いいたします。

よろしいでしょうか…、それでは黙とう。

（黙とう）

どうぞ、お直りください。ご協力ありがとうございました。

それでは改めまして、皆さま、こんにちは。私はただいま、ご紹介いただきました岩手大学地域防災研究センター副センター長を務めております、越谷と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

皆さま、本日は遠路、あるいはお寒いなか、ようこそ岩手大学へお越しくださいました、センターを代表いたしまして、心より歓迎申し上げます。本日は、たくさんの方々にご参加いただいておりますが、実はここにいらっしゃる方だけではなくて、ここから少し離れた同じ工学部の敷地内にある、もう少し大きいテクノホールという部屋に、上田小学校６年生の皆さんがおられるとうかがっております。

スクリーンの映像が、おそらく向こうの部屋の映像ですが、上田小学校の皆さん、聞こえますか。

【上田小学校６年生】　（スクリーンに手を振って応える小学生の様子が映る。）

【越谷　信】　それでは今日１日、長くなりますが、よろしくお願いいたします。会場間を映像でつなぐのは、初めての試みです。

それでは最初に、私どもの地域防災研究センターが、どういうことをやっているのか、簡単に、ご紹介申し上げたいと思います。

私どものセンターは、地域で暮らしている人たちの視点に立って、津波災害や、そのほかの自然災害を少しでも減らしていこうという目的で、岩手大学としては初めての研究センターとして、昨年４月に設立されました。

私たちのセンターは、３本の柱でできております。１つ目の柱は、自然災害はどうして起きるのだろうか、どうしたらそれを防げるのだろうか、あるいは少しでもそれを軽くするにはどうしたらいいのだろうかという研究をしているところです。

２つ目の柱は、そのような研究を踏まえ、また地域の特徴、例えば、地域の歴史、地域の風土、人々の暮らし方、そういったものを生かしつつ、安全・安心で過ごせるまちづくりを研究していくところであります。

これらの成果から、防潮堤をつくる、あるいは避難路をつくっていくことも、もちろん大切です。ただ、いろいろな施設をたくさんつくっても、それだけでは、災害を防ぐためには十分ではないと私たちは考えています。

そこで３つ目の柱として、私たちは災害文化部門というものを設けています。そこでは、そこに暮らしている人たちが、防災に対してどのように考え、どのように行動するか、そういうことをより深めています。災害文化とはなかなか聞きなれない言葉ですけれども、度重なる災害の経験から、普段生きているなかで防災について考え、行動に移し受け継いでいく。そのなかから生まれてくるのが災害文化であって、何々をしたからこれが災害文化ですというものではなくて、行動そのもののなかに生まれていくものだと、私どもは考えております。

本日のこのフォーラムも、まさにその災害文化をつくり上げていこうとする活動の一つとして行われるのではないかと思っております。

今日は、田畑さまを初め、遠路たくさんの方に来ていただきました。これから貴重なお話を聞けると思います。本日のフォーラムが皆さまにとって、防災に対する考え方を深めて、防災に対する行動を何か始めるきっかけになってくれれば、大変うれしいことだと思っております。

最後になりましたが、本日は多数のご来賓の先生方にお出でいただきましたので、ご紹介申し上げたいと思います。恐縮ではございますが、お名前をお呼びいたしましたらば、ご起立のうえ、会場のほうにお顔が見えるように、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

順番が不同になりますが、岩手県教育委員会教育委員長の八重樫さま。宮古市教育委員会教育委員長代理教育委員の荒谷さま。盛岡市教育委員会教育委員長の星野さま。岩手県総合教育センター所長代理主任研修指導主事の掘切さま。

先生方、どうもありがとうございました。それでは、本日のこのフォーラムが実り大きなものになりますように、祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。本日は、どうもありがとうございました。

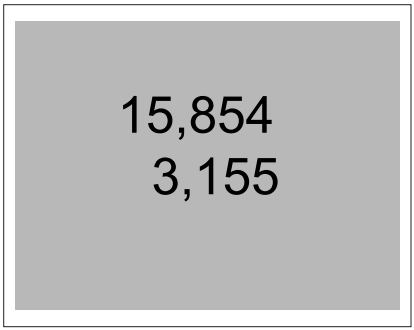
【山崎友子】　それでは司会のほうから、進行についてお話ししたいと思い

ます。

本日、２つ目のプログラムで、田老第一中学校の生徒さんが、語り部活動を行ってくれるのですが、実は３時半にここを出ませんと、学校に戻ったあとスクールバスで７方向に分かれて帰るそうなのですが、それに間に合いません。３時半に生徒さんが退場するまでには、重要なところをたくさん聞いてもらえるように、切りのいいところで終わるようにということで、少しかけ足で進行させていただきたいと思います。

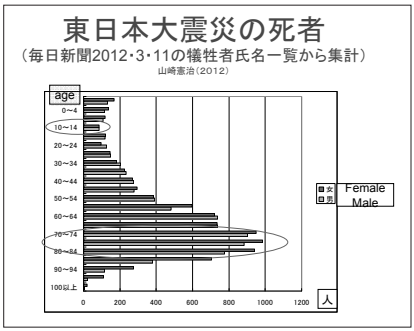
登壇者の皆さまには、会が終わりました後、30分残っていただくようにご了解をいただいておりますので、来場してくださいました皆さんは、終了しましたあとに、いろいろご質問等をなさってください。よろしくお願いいたします。

次に、このフォーラムには研究チームがありまして、科学研究費を頂いて、「地域と協働した津波防災教育のモデル開発研究」を行いました。その研究チームを代表しまして、簡潔にお話しをしたいと思います。



この数字、皆さん、おわかりだと思いますが、「15,854」、「3,155」、これは震災の１年たったあとに発表されました、亡くなられた皆さまの数、それから行方不明の皆さまの数です。

非常に大きな犠牲でした。その声なき声に耳を傾けるということ、これは私たちの仕事ではないかと思います。いろいろなかたちで声が聞こえてきます。例えば、東日本大震災の死者数について、５歳幅でグラフをつくってみました。下のところ、犠牲が一番大きかったところは、高齢者の方々です。



これは、日本全体で高齢化という

ことが課題になっているわけですが、そのなかで、高齢の皆さんが、安全に安心して暮らせる社会になっているかどうか、そういう課題を、三陸の地から日本社会全体へ、私たちに問いかけていると言えると思います。

もう一つ、上のほうの犠牲が少なかったところにご注目ください。10歳から14歳です。２時46分の地震で、学校が組織的な避難行動を取ってくださった、そのことが、この数字になっているのだと思います。犠牲をさらに少なくし、減災という点で組織的な行動、これが一つの大きなヒントだということを教えてくれていると思います。

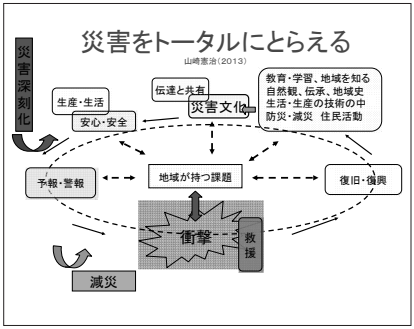
簡潔に、私たちの研究でわかったことを３点にまとめてみました。災害というのは、今お話ししましたように、自然のいろいろなパワーによって、私たちが日常的に抱えていた課題を教えてくれる、あぶりだしてくれるものだという視点で、考えるといいと思います。

「地域と協働した津波防災モデル開発研究」でわかったこと

1. 災害は地域社会がそれまでに持っていた課題を明らかにすることが確認された
2. 災害は、長いスパンで、トータルに考える必要がある
3. 災害による被害を減じる力として「災害文化」がある。災害文化の重要な側面に「教育・学習」がある。

それから２番目、衝撃のあったとき、そのときだけではなく、被災地の皆さんは、いま復興というなかで、さまざまな新しいものの見方、力を獲得されていっているところだと思います。こういうことを、見聞きして、私たちは災害というのは、もっと長いスパンでトータルに考える必要があると思っています。その図は簡略ですが、次のスライドでお示ししたいと思います。

３番目ですが、先ほどの副センター長からの話しにありましたように、災害による被害を減じる力として、ハード面の対応だけではなく、ソフト面の対応、これが非常に重要なものになっていく。それは災害のときだけではなく、そのあと、さらに生まれていっているものではないでしょうか。



６つぐらい災害文化を構成する側面を考えてみたのですが、そのなかでも教育・学習は、非常に大きなものがあると思います。衝撃は地域が持つ課題を、このように照らし出してくるわけですが、復興の過程のなかでさまざまな側面において、その地域の力がさらに強いものになっていきます。安心・安全な社会をつくるには、災害をトータルに考えていくことが必要ではないかと思いました。

そういうことで、今日はこのような教育があって初めて、減災、そして災害文化を深化していくことができると思い、関係の皆様に登壇をお願いしました。本日は田老第一中学校の皆さまに来ていただき、子どもたちの力をテーマにしています。この長いスパンで考えると、未来は子どもたちがつくっていくもので、子どもの力に焦点を当ててフォーラムを考えました。どうぞ皆さま、今日一日よろしくお願いいたします。

それでは、最初の登壇を田畑ヨシさまにお願いしました。準備をしている間に、皆さんご存じだと思いますが、田畑さんをご紹介いたします。田畑さんは昭和８年、８歳のときに昭和の大津波に遭われました。そのときの体験を紙芝居になさって、30年以上にわたってボランティアとして、紙芝居によって津波の怖さを伝え、警戒する気持ちを伝えてきておられます。

きっかけになりましたのは、お孫さんが三陸に住むようになられた、これは津波のことを教えなくてはいけないと思われてのことだったそうです。今回の震災で、またご自宅を流されましたけれども、２カ月後に紙芝居を再開なさっています。

そのお孫さんのお母さまが高橋恵美子さんで、今日は補助に来ていただきました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

第 1 部

（講演会）

■ 紙しばい『つなみ』

田　畑　ヨ　シ

（2012年 防災担当大臣表彰受賞、2013年 岩手日報文化賞（社会部門）受賞）

【田畑ヨシ】　皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介にあずかりました宮古市田老出身、田畑でございます。

このたびの災害には、皆さまにはいろいろご支援をいただきました。本当におかげさまを持ちまして、家は流されましたが、息子が幸い青森市に住んでおりましたので、そこに迎えられて、現在は青森市民となって暮らしております。

このたびは、このような催しにご招待されまして、岩手の皆さまともお会いできたことを本当にうれしく思っております。これからもどうぞ、よろしくお願いします。これから私のつたない紙芝居ですが、読ませていただきます。

（紙しばい）

昭和８年３月３日、午前２時、大津波体験のまま。

「よっちゃんのすんでいる村は、青い青い海と白いどこまでもつづく長い砂浜がありました。きれいな川が流れ、町のなかはしずかで、ときどき荷馬車が、カタコトカタコト音をたてて通る、しづかなしづかな村でした。

よっちゃんのお家には、白くて長いおひげをはやしたおじいさんがおりました。おじいさんは、いつもよっちゃんに津波のお話しをしてくれました。

明治二十九年の津波に流されて、たった一人ぼっちで助かったおじいさんでした。いつかきっとまた津波がくるのだからな、大きな地震がゆったなら一人でもうらの赤沼山に逃げるんだよ。大きな山のような波がきてさらわれるんだから。おじいさんは津波のときに逃げなかったので、家の下になって流され、気がついたときにはざんがいやらごみのなかにうもっていて、ようやくざんがいのなかではいだしてみたら、みわたすかぎり家はなく、中田部落の吉川さんのおうちまでたどりついて、お世話になって助かったものだと、いろりの前で煙草を吸いながら話してくれました。

よっちゃんは、津波がきたゆめをみました。お家にあるあの大きなかまどのうえにあがって助かったゆめでした。ああそうだ、津波がきたら山ににげなくても、あのかまどのうえにあがったならたすかるだろうなといつも思っていました。

三月三日のおひなまつりの夜でした。お婆さんとねていると、ガタガタッと大きな地震がゆりました。よっちゃんはとびおきて、お婆さんとはだしのまま赤沼山の下までかけていって、ぶるぶるふるえていると、お母さんが妹をおぶって、お婆さん、よしこー、と大きな声でよぶ声がして、電気もついたす家にかえっておいでとむかえにきたので、お家

にかえってみたら、いろりには、おおきな火がもえて、しんせきのおじいさんがきて、明治二十九年の時の津波のことを話していました。

よっちゃんがこわくてぶるぶるふるえていると、お婆さんが寒いならこの袖無しでも着てといって、長い毛皮の袖無しを着せてくれました。おじいさんは津波がくるかもしれないからにげるじゅんびをするようにと言って、お父さんはたい松をたばねておき、わらぞうりを皆のぶん、げんかんにそろえて、大切なものをカバンに入れて、持ってにげるばかりにじゅんびをしておりました。

しんせきのおじいさんは、井戸の水も、川の水もひけないから津波はこないだろうといってのんきに話していました。するとまもなくまた地震がゆり、お父さんが津波だ、逃げろうと大きな声でさけびました。

海のほうからドーンと大きな音がしました。よっちゃんはむちゅうになって、げんかんのぞうりをつかんで、はだしのまま走ったが、長い袖無しが足にからまって、なんかいもなんかいもころびながら、赤沼山に登りました。

赤沼山にむちゅうになって逃げたが、畠にかきねがあってとびこえることもできないし、下からくぐろうといっしょうけんめいにもがいていると、大人の人たちは、よつちゃんの上をとびこえていきました。ここで波にさらわれるかなあと思って、いつもお婆さんが地震のときにとなえているマンザラクマンザラクととなえて、ようやく、かきねをくぐって畠にでました。

にげた人たちは、皆かぞくの名前をよんでいます。お母さん、お父さんなどとさけんでいます。よっちゃんもこころぼそくなり、大きな声でお婆さん

とさけんだら、すぐそばにお婆さんと兄さんと姉さんがきて安心したが、おじいさんがとしよりだからと心配で、おじいさんをよんでもみえないので、そのままうしろの山のてっぺんまでのぼって、朝になるのをまっていると、おじさんがお母さんは、足を両方けがをしているとおしえてくれました。兄さんはおじさんについてゆきました。

早く夜が明けるといいなと思っているうちに、だんだん明るくなり山からおりてみると、皆家はなく、海だけが高く青くすんで、ざんがいといやなにおいがしていました。お寺の前には、なんにんもけがをした人たちがわめき、流れた人がそのままこごえて死んでいる人、よっちゃんは田老はもういやだ、海のない所にゆきたいと思いました。

よっちゃんのしんぱいしたおじいさんは、いつのまにかお寺の本堂の前にすわり、げたのはなをのないものをたくさんつんで、わらを手でいっしょうけんめい、なっていました。おじいさんはなにをするのかなあとみていると、げたにわらでなったおをたてて、はだしのままにげた人にあげておりました。おじいさんは、えらいなと思いました。

お寺のくりのなかに入っていったら、お母さんは足を両方白いきれでまいて、こたつによこたわっていました。よし子、母さんはこんなになったよといってみせてくれました。よっちゃんは、たまらなくかなしくなりました。お父さんもお母さんを助けようとして、腰をいため、あるけなくなったとお婆さんは話してくれました。

遠くのしんせきの人のくるのをまって、お母さんを戸板にのせて、四人でかついで、山道を宮古の病院へ運んでゆきました。お母さんは、お婆さんに

子供達をたのみますと言って涙をながしていました。

よっちゃんはお寺のかいだんのうえから、お母さんのゆくのをじっとみながら、なきたいのをがまんしてみおくりましたが、なみだをこらえたらとてものどがいたくなりました。

心のなかでよつちゃんは、海のバカヤローとなんかいもなんかいもさけびました。

おわり。

【山崎友子】　ありがとうございました。田畑さんはご自身の経験を、「私は」ではなくて、「よっちゃんは」と三人称で語ってくださっているので、皆さんもよっちゃんに自分の気持ちを重ねてお聞きになったのではないかと思いますが、今回の震災で、よっちゃんのような体験をした子どもたちがたくさんいました。その子どもたちに一言田畑さんから、何か言っていただけますでしょうか。

【高橋恵美子】　今回の震災で、おばあちゃんみたいな経験をした子どもさんたちがたくさんおります。その子どもさんたちに向けて、おばあちゃんからのメッセージをお願いします。おばあちゃんから一言、子どもさんたちに。

【田畑ヨシ】　このたびの震災によって、ご家族を亡くされた方もあると思います。災害は忘れたころにやってくると言いますが、明治29年の津波と、また昭和８年の津波で、おじいさんも２度遭っているんです。いつ、どういう目に遭うものかわかりません。

おじいさんのように２度は津波に遭いたくないなあと思ったら、私もとうとう２度遭ってしまいました。一人で住んでおりましたが、住むところもな

く、幸い妹が高台に住んでおりましたので、妹のところに身を寄せて、１カ月半ばかりどこにも動かれないまま過ごしていました。堤防がありましたが、もう残骸だらけで、自分の屋敷を見たくても１カ月半ぐらい見られない状態でした。

【高橋恵美子】　おばあちゃん、子どもさんたちへのメッセージ。被災した子どもさんたちに。

【田畑ヨシ】　このたびの被災で、子どもさんたちも皆、ご家族を亡くされた方もあると思いますが、頑張ってください。私も８歳のとき、母を亡くして、もうおじいさんのようには２度も遭いたくないと思っておりましたけれどね。一人で住んでおりましたのが、東日本の震災で流されて、とうとう私も２度も遭ってしまいました。だから災害は忘れたころにやってくると言いますので、その気持ちを忘れないよう、どうか皆さまも頑張ってください。田老復興のために頑張りましょう。

テクノホールで紙しばいを聞く上田小学校６年生

【山崎友子】　ありがとうございました。足元お気をつけて。

それでは、災害は忘れたころにやってくる、風化、これが一番怖いということで、学校として語り部活動を行っていらっしゃる田老第一中学校の３年生の皆さんに、語り部活動をお願いいたしました。皆さん、どうぞ、檀上のほうにお上がりください。

■ 宮古市立田老第一中学校生徒の語り部活動
―田老第一中学校の現状と語り部活動について―

菅　井　雅　之（田老第一中学校長）

【菅井雅之】　私は今年の４月より、宮古市立田老第一中学校に勤務しております校長の菅井雅之と申します。本日こういう場を与えていただき、大変ありがとうございました。また、岩手大学地域防災研究センターさまには、津波体験作文集『いのち』の発刊をはじめとして、さまざまな面から、多大なるご支援をいただき、心より御礼を申し上げます。

あの日、平成23年３月11日の震災発生から、２年と８カ月余りが経過しております。おかげさまでたくさんのご支援を受けまして、本校の教育活動もようやく軌道に乗りはじめたところであります。

また、田老地区にもようやく復興の「つち音」が聞こえはじめました。今年６月より、防潮堤・防浪堤の復旧工事。そして４月からは高台移転住宅地の造成工事、また三陸縦貫自動車道の本格工事も始まっております。田老地区市街地の土盛り工事や、災害公営住宅の建設も、年明けには本格的に始まると聞いております。

そのようななか、生徒たちは、これまでも震災津波の体験を教訓として伝え残すため、さまざまな発信活動に取り組んで参りました。つらい体験をした生徒たちもいるなか、その体験を語り、教訓を風化させないよう取り組んできた生徒たちの心には、本校校歌の三番に込められた思い入れの共感が大きいと感じております。

「防浪堤を仰ぎみよ、試練の津波　幾たびぞ、乗り越えたてし、わが郷土、父祖の偉業や　跡つがん」という歌詞です。この歌詞に込められた思いを受け、生徒たちは、津波体験作文集『いのち』に、その思いを綴っていま

した。

本日は、その作品集『いのち』を基に、教訓を風化させず、語り継いでいく取り組みとして、今年４月の修学旅行の際に行われました、「田老を語る会」での活動を発表させていただきます。

今後も本校では、この震災を踏まえた復興教育を継続し、震災の記憶を風化させないようにするとともに、生きた防災教育を進めるため、佐々木力也前校長先生が中心となって、本校の２階に開設しました震災関連の資料展示室ボイジャーを、震災学習のデータベース拠点として、また生徒の調べ学習の場として、活用していきたいと考えております。

そして田老一中を巣立っていった生徒たちが、やがて父、母となり、祖父母となって、子や孫の世代に、やがてまた来るであろう津波から、一人一人の命を守るための教訓や、防災の術を確実に伝え、受け継いでいけるよう、これからも復興教育の推進にあたっていきたいと考えております。

ご参会いただきました皆さまとともに、本日のフォーラムからたくさんのことを学び、今後の活動に役立てていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

―３年生による語り部活動―

学校紹介、田老の町の紹介、体験談、田老の現状報告、校歌

田老第一中学校３年生

【生徒・丸山恭生】　１、はじめの言葉。これから田老語る会を始めます。本日司会を務めます田老第一中学校３年の丸山恭生です。不慣れですが、精一杯務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

２、学校紹介。はじめに、本校の紹介を３学年委員長の水沼毅己さんがします。それでは、水沼毅己さん、お願いします。

【水沼毅己】　こんにちは。僕たちは宮古から来た田老第一中学校の３年生です。僕たちは自分たちが住んでいる田老が好きで、田老に住んでいることに誇りを持っています。

２年前の３月11日、東日本大震災で、僕たちは多くの被害を受けました。津波で多くの大切なものを失いました。そのとき僕たちは小学６年生で、４月からの中学校生活への期待が一瞬にして、明日からどうやって生きていけばいいのかという不安に変わりました。

しかし、今日、僕たちは自分たちに何ができるのか考えながら、前を向いて一歩一歩進んでいます。生徒会活動として、資源回収や、さまざまなボランティア活動をして、地域の方々に喜んでもらえるような活動もしています。

皆、当たり前の毎日に感謝をしながら、勉強やさまざまな活動に精一杯取り組んでいます。今日は僕たちの住む田老の町の紹介、田老における津波の

被害、そして田老の現状について、皆さんにお伝えできればうれしいです。
どうぞ、よろしくお願いします。

【丸山恭生】　ありがとうございました。

３、田老の町の紹介。それでは、これから田老における津波の被害についてのスライドをご覧いただきます。準備がありますので、少々お待ちください。

…それでは、ご覧ください。

【生徒１】　三王岩が美しく輝く私たちの故郷、宮古市田老。この町は漁業が盛んで、昆布など海藻が豊かに茂る沿岸には、天然アワビやウニなどが豊富に生息し、アワビの水揚げが県内トップクラスを誇る好漁場にも恵まれています。

さらにワカメ、昆布の養殖漁業をおこない、ブランドワカメ「真崎わかめ」を産出しています。津波とともに生きてきた田老の町は、これまで幾度となく津波の被害に遭ってきました。しかし、そのたびにそれを乗り越えてきています。

昭和８年の大津波のあと、この町は何もなくなりました。町の人たちは、たくさん話し合いを行い、海の側を離れずに、もう一度同じ場所に町をつくり上げることに決めたそうです。

【生徒２】　そこで出来たのが、この巨大な防浪堤です。これを田老の万里の長城と呼ぶこともありました。この防浪堤は、町を囲むようにできています。当時の町の人たちが、大人から子どもまで総出で、山から土を運んでつくったそうです。

さらに町は碁盤の目につくられ、交差点は区切りがしてあり、津波が来たら混乱せず、素早く山に逃げられるような工夫がしてありました。そしていつしか防災の町として、知られるようになっていきました。そんな二重の防浪堤に囲まれた私たちの町にあの出来事が起こります。

【生徒３】　３月11日、防浪堤を超えて津波が押し寄せてきたのです。中学校にいた生徒たちは、学校がもともと民家に囲まれていたため、津波はまったく見えず、避難した校庭の真ん中に待機していました。気づいたときには、波は校門にまで迫っていました。

「津波だ、逃げろ」の声で、それぞれ町の人たちを助けながら、必死に山をはい上がったそうです。校庭には、家がたくさん流れ込んできました。校

舎の１階は、近くにあった家の畳や、ドアや、生活用品が、泥とともに散乱し、楽しく卒業アルバムを眺めて過ごしていた３年生の教室は、めちゃくちゃになってしまいました。

町は、いつもの町ではなくなりました。瓦礫だらけの町には、道はなく、自衛隊や、さまざまな人たちが必死に復旧作業にあたってくれました。

【生徒４】　道ができるまで私たちは、線路を通って移動しました。暗いトンネルは、何も見えず、とても怖かったです。徐々に瓦礫が撤去され、学校の前には、何もなくなりました。家は土台だけ残され、町の景色は変わりました。壊れた建物が、津波の威力を物語っています。

町には瓦礫が残り、野球場があったところは、瓦礫の山です。瓦礫処理場に入るためには、このような準備が必要です。これらの瓦礫がなくなるのは、平成26年３月31日、この日までに処理することになっているのだそうです。

【生徒５】　これは仮設住宅ができる前に、田老の避難所になっていたグリーンピアという施設のアリーナの様子です。お互いのプライバシーを守るために、段ボールで仕切ってあります。いまではこのアリーナは、避難所の役目を終えました。

グリーンピアに建てられた仮設住宅の様子です。最近では、引っ越ししていく人も多く、空き家も目立ってきました。

無くなった商店街、しかし田老の人たちは諦めていません。皆で協力し、仮設店舗を建設しました。「た

ろちゃんハウス」です。「善助屋食堂」、「田中菓子舗」、このように店を開くまでには、多くの苦労があり、何度もくじけそうになったと語ってくれました。この「たろちゃんハウス」は、仮設住宅に住んでいる人にとって、なくてはならない存在です。

【生徒6】　私たち田老一中生も、初めは、いつ入学式が行われるのか、どこで授業をするのか、心配なことがたくさんありました。無事に行われた入学式は、中学校の校舎ではなく、小学校の校舎でした。制服もそろわず、先輩方もジャージ姿が目立ちました。

小学校の校舎を借りて授業を行い、徐々に落ち着いた生活を取り戻してきました。このような生活ができるようになったのは、全国からのたくさんの支援のおかげです。海外からもぞくぞくと支援物資が届き、私たちはとても勇気づけられました。このユニフォームも支援していただいたものです。おかげで大会に出場することができました。

これがいまの私たちの様子です。

校舎の修復が終わり、いまは例年どおり、さまざまな行事を行うことができました。私たちを支え応援してくれた皆さん、本当にありがとうございました。私たちにできることは、この体験を語り継ぐことだと思っています。地域の未来のためにも、私たちはこれからも頑張っていきます。

【丸山恭生】　ありがとうございました。

４、体験談発表。これから田老第一中学校３年生の、津波体験談の発表を行います。

初めに澤口倫代さん、お願いします。

【澤口倫代】　大きな地震のあと、私たちは校庭に避難しました。２日前にも地震があったけど、何も起らなかったので、私は友達と、「どうせ津波は来ないでしょう、お母さん、来ないかな、早く家に帰りたいな」などと、笑いながら話していました。ラジオから津波注意報が、津波警報に変わった報道が流れてきましたが、その違いもよくわからずにいました。

すると友達が、「警報だと絶対津波が来るんだよ、田老に津波が来るんだよ、今日」と言いました。私はどんどん不安になってきました。さっきまで笑いながら冗談を言っていたのに、自分の家族と町が心配になってきました。そんなとき、母が迎えに来ました。母の顔を見て、不安だった気持ちが、一気に吹き飛びました。

安心した私は、車のほうへ母と歩き出しました。すると、いきなり母が悲鳴を上げました。「あれ、見て」。母の指の先を見ると、黒くて渦を巻いた津波が堤防を乗り越えて、家やお店を飲み込んでいました。私と母は呆然と

して、数秒その波を見ていましたが、母に手を引かれ、車に乗り込み、まだ波が来ていない道を進みました。

横から波や家が流れてきましたが、近くのお寺の坂は上がることができました。しかし、坂は急カーブになっています。いつもはスムーズに曲がることができますが、そのときは母が焦っていて、なかなか曲がることができませんでした。すぐ後ろに波が迫っていて、私は怖くて怖くてたまらず、「お母さん、急いで」と騒ぎました。でも思い直し、母を落ち着かせようと、今度は「大丈夫、大丈夫」と何度も言いました。

母は一度深呼吸をして、心が落ち着いたのか、すんなり曲がることができました。今度こそ本当に安心することができ、私は上のほうから田老の町を見ていました。家が流されたり、壊れたり、車が流されたり、さまざまな信じられない光景が広がっていました。それを見ながら、あと少しで私の命も危なかったと、本気で思いました。

母は、とにかく子どものことが心配だったと言っていました。いまは家族で、今度こんな災害が遭ったらどうするか話し合っています。真剣に考えています。あと数秒遅れていたら、私はどうなっていたかわかりません。

【丸山恭生】　次に、下西彩貴さん、お願いします。

【下西彩貴】　津波が来たその日、私は、父と姉とともに学校へ泊りました。寒くて、ごはんもなくて、いま何時なのかもわからなくて、長い長い１日のような気がしました。２日目は父が乗っている車が流されずに残っていて、父と姉と３人で、真っ暗で怖いトンネルの中を歩きながら、車の場所に行き、宮古市内の祖父母の家に行きました。

途中で母とも合流して向かいました。立ち寄った店は、食料品は全て売り切れていて、何も残っていませんでした。次に行った店で、やっと少しの食料を買えたので、それを持って、祖父母の家に行きました。

祖父母は元気で、無事に会えたときは、とてもうれしかったです。祖父母の家も、電気もつかなくて、水も出ませんでしたが、学校にいるときよりはましでした。

その日の夜に、電気と水道が、この地域では少しずつ復旧しました。そのとき少し安心しました。

３日目は、田老の祖父母と祖父母を探しに、また田老に戻りました。祖母の所在はわかりましたが、祖父は津波が来たとき船で沖に行っていて、まだ海から帰ってきているかわかりませんでした。

しかし、目撃情報も多数あり、いつも元気で明るい祖父が流されているはずがないと信じ、きっと戻ってきていると信じて、一日中、田老を歩き回って探しました。そのときの田老の町は、いつもの町ではありませんでした。自宅のあった場所には、防浪堤の大きな破片しか残っていませんでした。

やっと祖父と会えたときは、もう夕方でした。そこから避難所に行き、祖母と合流しました。いつも元気な笑顔を見せてくれる祖母は、そのときは、とても力なく笑っていました。避難所にいた祖母は、逃げている最中に、とても大事なものを忘れて、家に戻った際に津波に流され、水に浮かんでいるときに近くの人に救助されて、打撲とけがをたくさんしていました。でも祖母が、生きていてよかったと思いました。

その日から、私の避難所生活が始まりました。５月になり、田老地区のたくさんあった避難所を、グリーンピアという施設に集めることになり、私の家族や祖父母もそこに引っ越しました。ボランティアの方々に支えられながらの生活でしたが、そこには友達や知り合いも多く、慣れると楽しく生活することができました。

だんだんボランティアの人に、いつまでも支えられていてはいけないと思い、自分も何かしなければという気持ちになり、少しずつ手伝いをするようになっていきました。

今回の震災では、たくさんのことを学び、これからの防災について考えることができました。私は、これからも感謝の気持ちと、今回学んだことを忘れずに、これから生活していきたいと思います。

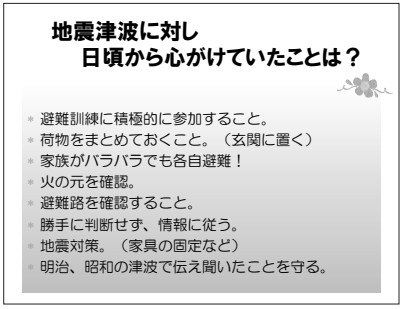
【丸山恭生】　ありがとうございました。

５、田老の現状報告。次に地域の方々へのアンケート調査の結果を報告します。準備があるので、少々お待ちください。

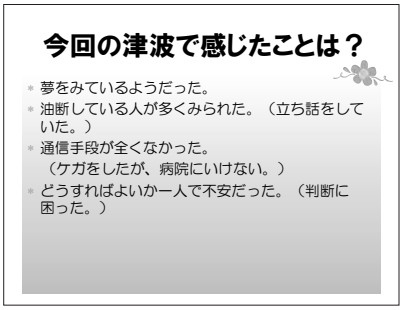
…それでは、お願いいたします。

【生徒７】　それでは、田老の現状について報告します。私たちは田老の仮設住宅や、学校周辺に住む方々に、アンケート調査を行いました。その結果から、感じたことをまとめました。田老は、これまでも津波の被害に遭っており、そのたびに復興してきました。明治や昭和の津波で生き残った方々は、常日頃私たちに、防災に対する心構えを語ってくれていました。特に、昭和の津波を経験した方々は、高い防災意識を持っていました。

あなたが、地震や津波に対し、日ごろから心かけていたことは何ですか。



【生徒８】　避難訓練に積極的に参加すること。荷物を玄関などにまとめておくこと。家族がばらばらでも各自避難すること。火の元を確認すること。避難路を確認すること。勝手に判断せず、情報に従うこと。地震対策、家具の固定など。明治・昭和の津波で伝え聞いたことを守る。



【生徒７】　しかし、実際に災害が起きてしまうと不安なことがたくさんありました。今回の津波で感じたことは何ですか。

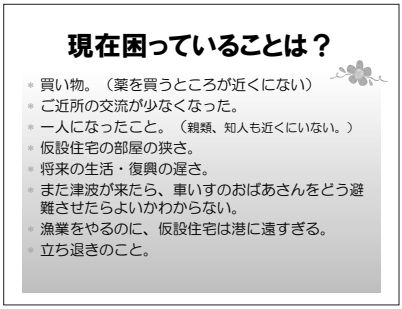
【生徒９】　夢を見ているようだっ

た。油断している人が多く見られた。通信手段がまったくなかった。どうすればよいか一人で不安だった。

【生徒７】　危機感が感じられなかったという声もあり、自分は大丈夫だと思ってしまう油断があったように感じます。また、声をかけてもらえず、不安だったという声もありました。独り暮らしの高齢者の避難の在り方など課題も見えてきました。

現在困っていることは何ですか。

【生徒10】　買い物。ご近所の交流が少なくなった。一人になったこと。仮設住宅の部屋の狭さ。将来の生活・復興の遅さ。また津波が来たら、車椅子のおばあさんはどう避難させたらよいかわからない。漁業をやるのに、仮設住宅は港に遠すぎる。立ち退きのこと。



【生徒７】　現在田老の人口は、どんどん減少しています。65歳以上の人口の割合が高くなってきています。まだ仮設住宅に住んでいる方々のなかで、田老の中心部以外を今後の居住地に選択した人の割合は48パーセントで、半数近くが田老の中心部には住まないと回答しています。

私たちは田老が好きです。もとの町に戻ってほしいと願っていますが、この願いはかなうのでしょうか。東日本大震災を経験した私たちには、この経験を語り継ぐ使命があります。地域の方々から託された願いでもあります。中学生の私たちが、皆さんに語り継ぎたいこと。

全国の人たちへ。

【生徒11】　自分の命は、自分で守ろう。避難訓練に積極的に参加しよう。必要なものは玄関などにまとめておこう。知らない人でも逃げるときは仲間、呼びかけ合い、助け合おう。家族に避難場所を相談しておこう。最後は、皆で協力し合おう。自分勝手な行動を取ると周りに迷惑をかけてしまいます。

全国の人たちへ

- 自分の命は自分で守ろう。（てんでんこ）
- 避難訓練に積極的に参加しよう。
- 必要なものをまとめておこう。（できれば玄関に。冬ならば防寒着も。）
- 知らない人でも逃げるときは仲間。呼びかけ合い、助け合おう。
- 家族で避難場所を相談しておこう。（命があれば会える。）
- 被災後は、みんなで協力し合おう。（自分勝手な行動をとらない。）

【生徒7】　震災があり、つらいことや、悲しいことがたくさんありました。でも、そんな私たちを応援してくれる人たちがたくさんいました。

震災後、うれしかったこと、感謝していること。

【生徒12】　家族に会えたとき。自衛隊の方々やボランティアの方々の活動。支援物資をいただいたこと。支援の手紙。物資を分け合って皆が助け合っていたこと。電気がつくこと、水があること。人の優しさ、譲り合い、励まし合い、助け合った。そしてなぜか皆笑っていたことがうれしかった。文句を言わず我慢している姿が、かっこよかった。

震災後うれしかったこと、感謝していること

- 家族に会えた時。
- 自衛隊の方々やボランティアの方々の活動。（３日後にはガレキだらけの町に道ができていました。）
- 支援物資をいただいたこと。（その日の夜におにぎりを分け合って食べました。）
- 支援の手紙。（思いがけないところからたくさん届き、励まされました。）
- 物資を分け合ってみんなが助け合っていたこと。
- 電気がつくこと、水があること。（当たり前のことに感謝しました。）
- 「人の優しさ」ゆずり合い、励まし合い、助け合った。そしてなぜかみんな笑っていたことがうれしかった。
- 文句を言わず我慢している姿が、かっこよかった。

【生徒7】　たくさんの優しさに触れ、今度は自分たちがそれを実行する番

だと強く思いました。先輩たちが言いました。校歌には、私たちの進むべき道が記されていると。校歌三番、「防浪堤を仰ぎみよ、試練の津波　幾たびぞ、乗り越え立てし、我が郷土、父祖の偉業や　跡継がん」。

私たちは、ふるさとの復興を願っています。

【丸山恭生】　ありがとうございました。

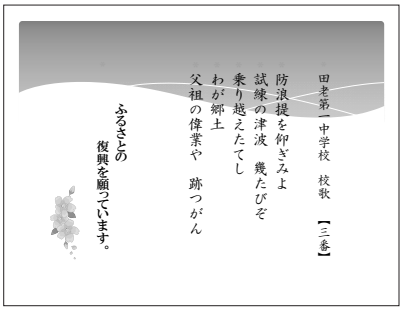
６、校歌。現状報告にもありましたように、私たちの校歌には、津波を乗り越えてきた先人たちの思いが込められています。これから、私たち田老第一中学校３年生全員で校歌を歌います。田老一中生は、起立してください。

【生徒13】　校歌三番用意。

【生徒全員】　おおーっす。

【生徒13】　防浪堤を仰ぎみよ

【生徒全員】
防浪堤を仰ぎみよ
試練の津波　幾たびぞ
乗り越えたてし
我が郷土
父祖の偉業や　跡つがん



【丸山恭生】　７、終わりの言葉。
これで田老を語る会を終わります。ありがとうございました。

【山崎友子】　田老一中の皆さん、本当にありがとうございました。
今日のフォーラムのタイトルには、「被災地に学ぶ」ということがあります。本当に皆さんの力強さから、学ぶことがたくさんあります、伝わってきました。ありがとうございました。

次は講演を、宗貞研さんにお願いしました。準備があります。お待ちください。その間に、宗貞さんをご紹介致します。

宗貞さんは公益社団法人日本国際民間協会に所属され、看護師、心理カウンセラーとして、社会心理的心のケアを担当されています。民間というかたちで、それから、個々の人のケアという面で活動をなさっています。主に宮城県名取市で活動されています。

宗（むね）さんというふうに、活動先では呼ばれていらっしゃるそうです。宗さんに講演をお願いいたします。

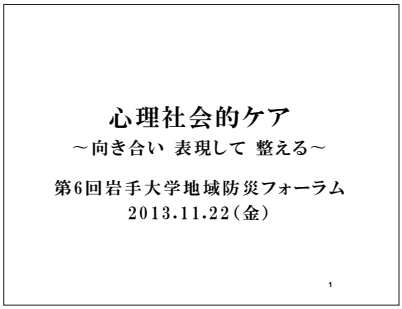
■ 講演「心のケアと子どもたち」
東日本大震災の被災地宮城県名取市での支援活動を踏まえて

宗　貞　　研（公益社団法人日本国際民間協力会　ＮＩＣＣＯ）

【宗貞　研】あらためまして、皆さんこんにちは。紹介いただきました宗貞研と申します。

日ごろは、宮城県名取市で活動しているのですが、子どもたちや親御さんからは宗（むね）さんと呼ばれています。今日は堅苦しくなく、現場で一緒に仲間としてやっておりましたので、宗さんと、皆さん覚えていただければと思います。

先ほどの田老一中の皆さんの発表、そして、田畑ヨシさんの紙芝居を聞いていて、本当に心に届きました。こうやって包み隠さず、自分たちの体験をしっかりとかたちにして



出していくこと、これが何より心のケアに重要なのです。

今日、私が30分強でお話しさせていただきます心理社会的ケア、「向き合い　表現して　整える」。実は、皆さんがやってきた活動と、そして、今日のように皆さんと震災、地震、津波と向き合うという時間は、とても大事なケアになっているのだと私は考えています。

この活動ですが、私たちの団体は陸前高田市、気仙沼市、名取市、この３カ所に事業所に置いて、震災直後から活動して参りました。私が行っていた名取市は、人口７万3,000人ぐらい、仙台のすぐ南、仙台空港は知っていますか。そこも名取市です。

このマスコットキャラクターは、カーナ君と言います。名取市はお花のカーネーションの産地なので、頭にカーネーションがついています。そして、仙台空港が隣接しているので、手から飛行機が飛び立っているのがカーナ君、ゆるキャラです。

名取市は東の沿岸部から、西の内陸部、山の方まで細長いまちです。仙台の南にあって、東の海の方から、市役所の直前まで波にのまれました。全体の３分の１が浸水、沿岸部にあった閖上港、サイクルスポーツセンターを含む閖上地区、そして、その南にある臨空公園や、仙台空港、ここが津波でのまれた場所です。

震災前の閖上のまちです。人口７万3,000人の名取市のなかで、この閖上地区はまとまったコミュニティーがあり、2,500世帯以上、5,500人以上の方々が暮らしていました。震災当日、仕事に出ている方を除いて、この閖上地区にいた住民の方は約4,000人、そのうち亡くなられてしまったのが750名です。名取市全体で911名の方が亡くなりましたが、700名以上は閖上地区の住民の方だったのです。

震災前から、このように変わってしまったのです。本当に色のない、まちがなくなってしまった苦しい現実でした。同じく仙台空港も、全て波にのまれてしまったのです。住宅街のようなものもあります。これが下増田地区北釜集落で、仙台空港に避難した方々も多くいらっしゃいます。あの日の震災によって、変わってしまいました。

今日、皆さんがしっかりとこうやって向き合っている時間、あえて向き合う、この時間を大切にしたいと思います。

これから、あの日何があったのか、避難した閖上中学校の校舎３階から、当時中学生だったワタナベアカリちゃんという子が、震える手で

デジカメを持って、動画を撮影していました。１分余りの動画ですが、津波が押し寄せてくる場面が流れております。もし、気分の悪い方がいらっしゃいましたら、目を背けるなどしながら、少し勇気を持って、皆さんと向き合っていきたいと思います。

（ビデオ上映）

いつも一緒に過ごしていた人や、知り合いの人、そして、まちに暮らしていた人たち、いつも暮らしていたまちが変わってしまいました。１日経って夜が明けて、全部まちの様子が変わってしまったこと、皆忘れることはできないはずなのです。あの日、見てしまった衝撃も、この覚えている光景も、そのときに受けた気持ちも、大事なものだって流されていったかもしれない。大切な仲間を失った人もいました。

閖上地区には、一つずつ小学校と中学校があったのですが、閖上小学校では当日病欠していた児童１名が、亡くなってしまいました。そして、閖上中学校は３月11日が卒業式だったのです。終わって謝恩会、その後、解散。地域に戻った皆のなかで、中学生の14人が亡くなってしまったのです。

名取市は、やや内陸部にある美田園地区と呼ばれる場所に、ＮＰＯ法

人地球のステージという、心療内科の桑山（紀彦）先生がクリニックをやっている場所がありました。桑山先生は国際協力をやっている先生で、海外の発展途上国の人たちや、国の支援が届かない場所、過疎の村々を訪れて、医療を届けているドクターなのです。

11

日ごろは地球のステージと呼ばれる公演活動を行っている先生たちと一緒に、この名取市で、先生自身も被災してしまったのです。それで、皆で一緒に、われわれ団体の仲間が医療支援から始めて、いろいろと心のケアをやってきました。

２年８カ月経って、もう皆さんのなかで忘れている、思い出せない、いやいや、もういいのではないか、震災のことはお腹一杯だったりします。だけれども、いまでも苦しんでいる人たちがいます。

ＰＴＳＤを聞いたことがありますか。病気のことです。心の傷の後遺症、あの日受けた大きな衝撃、怖いと思って傷ついた気持ち、これがずっとそのまま放置されてしまうと、うまく心の傷が閉じないで、しっかりと治らず、ぐちぐち膿んでまた苦しみを、そして、自分の体の症状となって出てきます。これが一番心配でした。

PTSD＝心のキズの後遺症

1）回避（Avoidance）
・被災した場所へ行くことが出来ない。
・地震や津波のことを語ることが出来ない。
2）侵入（Intrusion）
・突然、目の前に震災の映像が出てくる（フラッシュバック）
・震災と関係ないはずなのに怖い気持ちになる。
・思い出せるけど、その時の気持ちが湧かない。
3）過覚醒（Hyper-arousal）
・発汗過多、頻尿、不眠症、驚愕症などの症状がある。

少しお勉強みたいになるけれども、このＰＴＳＤを紹介させてください。ＰＴＳＤの三つの症状があります。回避・侵入・過覚醒といいます。回避というのは、簡単にいうと、被災した場所へ行くことができない。もう２年８カ月経っているのに、海がだめ、自宅の跡地も訪れられない。そして、あの日のことも、自分が体験したことも、語ることすらできないで苦しんでいる人たちがいるのです。

もう一つは侵入。ある日突然、自分の目の前にぽんと震災の、地震や津波などの映像が出てくる。それで驚いたり、パニックになったりします。普通にいまもこうしているのだけれども、震災と関係ないはずなのに、怖い気持ちが突然襲ってくる。ほかには、震災のことはきちんと思い出せるのだけれども、そのときの気持ちがどうしても伴ってこない。そう、出来事はわかるのに、あのときの悲しかった、怖かった気持ちがなかなか湧かない、こんな状態もあります。

３つ目は、過覚醒と呼ばれる状態。自律神経という神経の興奮状態、発汗過多、汗がたくさん出る。そして頻尿。夜中でも何度もトイレに行くようになった。また血圧が上がった。そして不眠症、やはり眠れない。睡眠不足が続いて、体調が優れない。伴って、落ち込んだり、うつになったり、いろいろなものが併発しています。驚愕症というのは、震災のことになると、ガタガタと震えが止まらなくなったりする。そして、パニックになったりする。いろいろな症状でいま苦しんでいる人が、もしかしたらいるのです。

今日、こうして皆がしっかりと語ってくれたこと、そして、ヨシさんが伝えてくれたこと、受け止められているだけ、そして皆さん自身がその出来事も整理できているだけ、このＰＴＳＤは予防され、心の整理がどんどん進んでいる。だからこそ、皆が勇気を持って、しっかりと表現まで出来るのだけれども、いまだにこれができずに苦しんでいる人たちがいました。

だから、私たちは津波被害の方々の支援、そのための支援活動を行ったのです。やはり大人の人たちも苦しんでいたけれども、子どもたちが心配でした。名取に暮らしている子どもたち、あの日、閖上小学校では、皆学校の先生たちの避難誘導のおかげで、直前に津波が来たことに気づいて、田老一中と一緒で「津波だ、逃げろ」と、体育館から渡り廊下を上って、校舎の３階屋上に避難したのです。

そんな経験をした子たち、校庭が波にのまれていく姿や、その流されていくまち、車、人、全部見ています。同じ体験をしても、大人の人だって整理が難しいこの出来事は、子どもたちだって一緒です。同じ体験をしているのです。

けれども、子どもの場合は放っておけば治る、そっとしておいて、時間を

味方につけながら、時がいずれ解決してくれると思われる。そんなものではないのです。２年８カ月経っても、いまだにこうして語れない子たちが、なかに埋もれているかもしれない。こうして苦しんでいる人たちがいるかもしれないからこそ、あえて向き合う、そして、表現すること、この大事さが伝わっていただければなと思います。

東日本大震災・津波被がいの支援

支援活動は、閖上小学校、下増田の子どもたちを対象にしたスカイルームと名付けました。皆とたくさん、いろいろなことをやりました。今日子どもたちを連れてきて、一緒に発表してもらえたらと思いましたが、代わりに紹介させていただきます。

ワークショップは、最初、遊びから始まります。先ほどのスライドで、一輪車に乗っていたりしたけれども、僕も行って一緒に遊びました。継続的に、同じ体験をした仲間で集まって、震災、地震、津波のことと向き合って取り組んでいこう。けれども、話したりすることが苦手だったりする小学生は、やはり遊びを通したプログラムで進めました。

簡単にいうと描画法で、まずは絵を描いてみないかということです。震災のことをきちんと描いてくれるのです。あの日覚えていた光景、自分がお母さんと一緒に津波から逃げました。そして、知らないお家だったのだけれども、壁が黄色くて、屋根が黒かった。そのお家の２階にはピアノが置いてあったから、お母さんはそこが無事だと言ったから、ここは

描画法

彼女はお母さんと一緒に津波から命からがら逃げました。そして見知らぬ家で心細い一晩を過ごしました。(10歳・女子)

丈夫だからと、お母さんと一緒に逃げた。当時４年生の女の子ミキちゃんが答えてくれました。

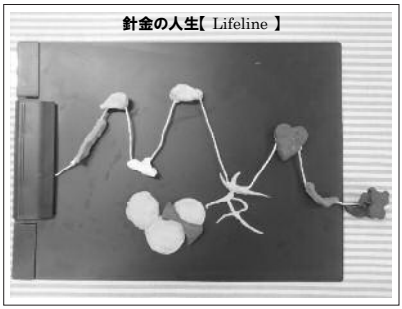
子どもたちは、きちんとあの日の体験を覚えているのです。そして、ゆっくりですけれども、こうやって触れていくことで、自分から心の扉を開けて、あの日の出来事を、わっとはき出すように、この絵の中に出してくれるのです。

ほかにも、粘土をつくってみたりもしました。最初は、好きなことと嫌いなことは何と聞いて、自由につくってもらいました。ある女の子がつくりました。私が好きなことは動物と遊ぶこと、だけど、嫌いなことは、破壊された信号機と壊れた家の破片。

子どもたちと一緒にやっていると、こうやって自然と、自分が嫌いなものが出てくる。ピーマンとか食べものが出てくるわけでもないし、嫌いなことはやはり地震と津波。そうして経験していることをはき出して、はき出して、こうやって話してくれるのです。

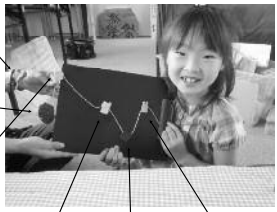
心のケアに必要なのは、語ることです。自分の、あの日覚えている光景も、そして、怖かった気持ちも、出来事だってしっかりと話すこと。それができる中学生、本当に今日は聞いていて優秀だなと思いました。だけど、小学生もこうやって、４年生のハルミちゃんはしっかりと答えてくれました。

ほかにも、少しユニークなものもやってみたのです。「ザ・針金の人生」、１本の針金を自分の人生に見立てます。いいことがあったときには上がって、悪いこと、悲しいことやつらいことがあったら下がって、こんな折れ線グラフをつくって、それぞれの場所に、粘土で目印を



つくってみました。

３年生のカオリちゃんがつくってくれました自分の人生、当時８歳です。一つ、運動会で１等になった、上がっています。次は下がった、プールで全然泳げなかった。運動することが大好き、体を動かすことが大好きなカオリちゃん。そのあと、泳げるようになった、やっぱり上がりました。そして、友達が増えて、自転車に乗れるようになった。さらに上がっています。



けれども、その次、大きくへこんでいます。やはり津波が来たことです。自分は津波が悲しい、自分にとって津波は嫌だった。このこともきちんと出してくれて、最後は、仮設住宅に暮らしているけれども意外に楽しい。実は同じ出来事だけれども、狭くて、苦しくて、不便で、そんな仮設住宅も、彼女にとっては友達が近くに集まってきたから、皆で生活できるから楽しい、こんなふうに言ってくれた子なのです。

ジオラマ制作法

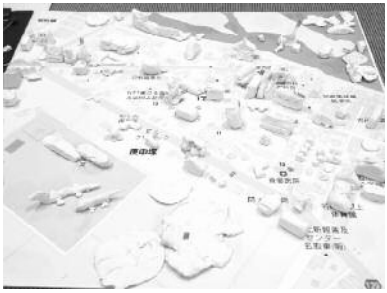
3つの段階

第一段階【過去】失われた街を復活させるジオラマ

第二段階【あの日】
あの日おぼえている光景のジオラマ（個人作品）

第三段階【未来】
自分たちが住みたい未来の街づくりのジオラマ

ジオラマ制作と呼ばれるものもやったのです。あの日の出来事で、自分の震災の前のことと、あとのことが断裂してはいけません。あの日の出来事も含めて、自分たちの人生だから、しっかりとつくっていこう。箱庭みたいなものだけれども、３段階に分けて、過去、あの日、未来、３つつくりました。



子どもたちは楽しんでくれたのです。こうやって地図のパネルを拡大したものを置いて、皆のまちのどこに住んでいた？この場所にあったも

のは何？というと、小学生の子たちはきちんと出てくる。住んでいた家、遊びに行った友達のお家、お母さんと買いものに行った場所、たくさんのものを紙粘土でつくってくれました。

それに色をつけていくのです。こうしてつくったものですが、これは何だかわかりますか。そう、閖上小学校です。自分たちの学び舎、小学校や建物、乗りもの、全部つくってもらって、土地も復活させました。震災前のように青々とした田んぼ、そして、広々とした校庭、その上に色を塗ったジオラマを置くと、こういうふうになるのです。

箱庭のように、その箱の中には子どもたちの皆の思い出や、物語が、ストーリーが入っているのです。

これは閖上中学校という場所に、なぜか恐竜がいます。でも、これは恐竜ではないのです。当時３年生の男の子が言いました。「僕、放課後に閖上中学校の校庭でトカゲを捕まえた。だからトカゲ」。大人の人がつくるものと違って、子どもたちは自由でしょう。大きさは関係ないのです。

こうやって名取川にもたくさんの巨大魚があったり、家より大きいト

ラックが置いてあったりします。そう、子どもたちは自由に、自分たちの思い出を、そして人生を、生きてきた土台をつくってくれたのです。

さあ、皆さんにクイズです。これは何でしょうか。はい、浜一番のみそラーメンです。お母さんと、家族と食べに行った、浜一番という中華料理屋さん。彼女がつくってくれたのは、浜一番のお店ではなくて、思い出のあのラーメン。大事だったのだろう、本当においしかった、だから、ちゃんとつくってくれました。

緑の建物は生協です。コープ、わかりますか。その生協よりも大きな大仏となっている、このお地蔵さんですが、生協の横にあったお地蔵さん。２年生の女の子が言ってくれました。５歳の時、初めてのお使いに行った。そのとき、初めてのお使いがうまくいきますようにといって、生協の買いものの手前にあるお地蔵さんにお祈りした。そうしたら、うまく大成功。それから、彼女は学校の帰り道、いつもこのお地蔵さんにお参りしていました。そう、子どもたちの大事な思い出は、どんどん大きなかたちになっていきます。

第二段階
あの日おぼえている光景ジオラマ

決して、それは大人がつくるスケールの、しっかりしたジオラマではないのです。これを行ったのは2011年の10月、半年経ってないころに子どもたちは、しっかりとまち並みを復活させてくれました。自分たちの土台を取り戻し、あえて向き合う、あの日覚えている光景へと突入していったのです。

勇気がありました。皆と一緒にやるから楽しんでやっています。やはり絵を描くのも、粘土をやるのも、針金をやるのも大好き。「自分たちの覚えている光景をつくっていいの？宗さん、俺、死体見たんだけど、つくっていい？」「いいよ、ちゃんと出してごらん」。自分たちの覚えている光景をどんどん出すのです。

最初に絵を描いてくれたミクちゃん。こうやってスタッフと一緒に話しながら、こうで、ああでと。そう、横断歩道があったことも話してくれながら、お母さんと逃げ込んだあの避難した場面、私が一番よく覚えている光景を紡ぎ出してくれました。

こうすることで、モヤモヤして怖かった気持ちや、ドキドキして何か整理できなかった記憶などが、皆きちんと向き合うことで、作品にしてはき出すことで客観視し、あの日の出来事とゆっくり向き合うことができるのです。

同じく４年生のリサさんは、仙台東部高速道路の下に瓦礫がいっぱい詰まっていて、燃えているところを描いてくれました。この子は震災から半年経つころに、おなかが痛くなり始めました。学校に行くことができなくなって、お母さんは心配して内科の先生と小児科の先生を回ったけれども、「どうもお母さん、この子少し心のほうだよ」、そう言われました。お母さんはスカイルーム、われわれのところに、リサさんを一緒に連れてきまし

た。

第三段階【未来】自分たちが住みたい未来の街づくりのジオラマ

一番初めから、いきなりこれをつくってくれました。すごく集中して、ワッと一気につくったリサさん。説明も見事です。具体的にきちんと細かくわかります。道路の下に引っかかっていること、そして、白い車があったけれども、その白い車は電柱のような、鉄パイプのようなものでグシャッとなっていた。「それを向こうのビルから私は見ていたんだ」。

あの日の記憶をしっかりと細かく表現できること、話せることは、実は心の整理が進んでいることなのです。けれども、怖い思いをそのままで整理ができてない、そんな子の場合は、ここまで詳しくわかりやすくつくることができないのです。

彼女はこれをつくって、一気に話して、心の重荷を下ろしたのか。それから、おなかが痛いのが止まりました。お母さんも言ってくれました。「おかげさまで、リサのおなかの痛いのが止まったのです。いや、とにかくスカイルームが楽しいと言うから、これからも通わせようと思います」。

そう、皆と一緒だから、こうやって、こんな場面もたくさんつくれるのです。あの日もしっかり取り戻して、皆未来へと向かっていきます。田老一中の皆もそう、上田小学校の６年生たちもそう、こうして復興を成し遂げたまちの、その発展を担うのは皆だから。どれだけ、自分たちがいいまちをつくろうか、小学生の子どもたちもつくりました。自由にどんなまちがいい、これだけ聞きました。さあ、地上に降りてみましょう。

名取閖上の未来のまちには、水ワンコがあります。津波の水を飲み込むロボット１号です。また今度津波が来たら、こうやって飲み込むロボ

ットをつくりたい。それで、ついでにロボット２号も置こう。最初はドラえもんをつくろうと思っていたらしいのだけれども、何でも出してくれるドラえもんではなくて、津波を止めるロボット２号を沿岸部に置きました。

何も言わなくても、きちんと防災も兼ねています。皆がこうやってつくった閖上タワーは、下は波が抜けていく構造になっている、わかりますか。そして、上には緑も生えていて、さらにビルの上には、赤い印で「Ｈ」と書いてあるでしょう。500mの高さを誇るこの閖上タワーができたら、皆がこの上に上って、もし津波が来ても避難できます。

自分たちの震災の厳しい現実にとらわれずに、しっかりと自由に想像力を取り戻してくれた子どもたち。未来のまちもつくってくれた、このジオラマ。ここまでやると、もうあの日の出来事もしっかりと、マイナスに振れた振れ幅もゼロに戻りました。

ここで、子どもたちのつくったジオラマのプロモーションビデオがあります。ぜひ、感じ取っていただけたらなと思います。

（ビデオ上映）

震災から１年で、子どもたちはこの取り組みを終えました。しっかりとあの日と向き合って、自分たちの出来事の整理を遂げた子どもたち。展示会を開いて、ショッピングモールに１カ月間飾りました。お父さん、お母さんも「ああ、あなたたち、こんなのつくっていたんだ、そうか。ああ、これ閖上じゃないの」。大人の人たちも涙して、自分たちのまちを見てくれたのです。

子どもたちの勇気ある取り組みを、こうして表現作品として出すこと。勇気が要りましたが、皆さんの思いをしっかりと分かち合うことができたと思います。

これだけで心の整理はじゅうぶん遂げられていくのですが、いやいや、そんなことはない。被災地はこれからもっと元気になる。心のケアを受けた子どもたちが、楽しいスカイルームの活動をどんどんやりたい、もっと表現したいということで２年目も継続しました。

２年目は、いよいよ表現活動。先ほど言ったように、作品にしたり、かたちにしたりするということ以上に、どんどんと震災のことも出してしまう。だってもう、整理を遂げたもの。自分たちは平気だよ。音楽ワークショップを行いました。

音楽ワークショップ

第一段階 「音を鳴らしてみよう」

まずは音を鳴らしてみよう。瓦礫のなかにあった木材を持ってきて鳴らします。不安になる大人をよそに、子どもたちは本当に元気です。歌に詞もつくりました。かっこ書きであてはめたのだけれども、津波のこと、震災のこと、未来のこと、皆の夢だって乗せました。そして、こんな歌詞ができたのです。

第二段階 「歌詞を創ろう」

１番は、地震と津波、そして、あの日の出来事や、その気持ちを込めて。２番には、子どもたちの、自分たちの未来、そして夢や希望を込めて。願いも込めた歌が出来上がったのです。

校歌の三番、田老一中の皆さんが

たすけあった日

作詞 箱塚屋敷団地のみんな

色んなもの　無くした日に
大切なこと　何か分かった
おじさん　ワンコを
助けてくれたよ
大きな　波から　ママと逃げた
淋しいこと　怖いことも
生きてたから　感じられたよ
もとの家に　帰りたいな
パパと　ママと　猫や　みんなと
津波や　地震は
もう来ないでほしい
希望や　奇跡は　いっぱいほしい
明るいまち　平和な世界
創れるような　未来がほしい

込めた言葉と同じ、自分たちで紡ぎ出した歌にメロディーをつけて、何とレコーディングをしてしまいました。まるで、子どもたちはカラオケか、ＡＫＢかというぐらい、恥ずかしがりながらも、皆で一緒のやるレコーディングは本当に楽しそうでした。

被災地にも行きました。屋外活動を利用して、宮城県にある沿岸部の高校、宮城県農業高校の作業場をお借りして、こんな場所でもやったのです。瓦礫のなかから鳴るものを集めて、皆で打楽器と歌の練習。そして、練習も皆で行けば怖くない。楽しい活動のなかで、こんなに夢中になっています。もうドラマーの誕生です。

当時３年生のキヨトシ君が言いました。「瓦礫のなかでつくった楽器でしょう。これは、じゃあ、『がれっき』じゃん」。グッドなネーミング、彼が命名したのです。練習を終えて、歌もやって、しっかりと発表会。それをまとめたものです。

第三段階　「録音しよう」

第四段階　「打楽器を創り出そう」

第五段階　「練習あるのみ！」

最終段階　「いよいよ発表会」

（ビデオ上映）

皆さんの心の拍手が聞こえます。ありがとうございます。

こうして、子どもたちは、自分たちがつくったものを、録画してＤＶＤにもしました。ＣＤにもしました。家族やお友達にプレゼント。こうやって自分たちが、今度は発信者となって、多くの人に届ける力になった。ラジオでも流してもらった。学校の先生にも聞いてもらった。いろいろなことを表現していきます。

さあ、2012年夏には映画にも取り組んでしまいました、名取市閖上の子どもたち。映画ワークショップとして、機材をそろえて。安い機材だけれども、すごく高性能。きちんとした映画のようなものも、低予算でつくれてしまう。

子どもたちと一緒に、物語『不思議な石』という映画を撮りました。心療内科医の桑山先生がつくった創作物語ですが、被災地に五つの石のかけらが散らばっていて、それを子どもたちが皆で駆け巡りながら集めていく冒険活劇。五つ集まった石から、亡くなった天国の人からのメッセージが聞こえてきます。

子どもたち自身が表現するのですが、その命の大切さと、生と死、しっかりと見つめて、自分たちのまちを訪れました。被災した時間と同じ時刻、夕方４時ごろ、あの被災した場所に戻って、小学校ロケから始まった。ほかには、自分の被災したおうちの跡地に訪れて撮影することもありました。

そう、震災と向き合う取り組み、皆と一緒にやるおしばいのプログラム。でも、学校の学習発表会や文化祭のおしばいの発表は一発勝負だけれども、撮影の場合、ＮＧを何回出してもオーケー。編集できるから。こうして、子どもたちは楽しく、皆で台本を片手に、いろいろな人のところにも行きました。被災した大人の人にも出会いました。

映画『不思議な石』は、こうして物語となり、作品が出来上がって、何と映画上映会まで開きました。名取市の大きな文化会館の大ホールを使って、2013年１月、子どもたち50人の作品を、多くの人たちに見てもらうことになりました。

当日は、社会人のボランティアの人や、大学生のボランティアの人たちも手伝ってくれて、会場はいっぱい、なんと1,300名入る会場に900名以上の方々が、新年の１月５日に、みんな見に来てくれました。

ここでその映画『不思議な石』の、子どもたちの演技の一部をご覧いただきたいと思います。クライマックス、石が五つ集まって、天国からのメッセージが聞こえてくるところ。小学生の子どもたち、中学年の３、４年生なのでつたない演技かもしれない。そして、撮影も押せ押せだったので、なかなか日のあたり具合とか、衣装がすぐ変わっていたりして、ちょっと…というところもあるけれども、その演技を見てください。

（ビデオ上映）

子どもたちはカメラを回してから、石を持っていた女の子はツゥ～と涙を流しながら、天国のメッセージを聞いていました。自分の役柄に沿いながら、相手のその物語の世界へもきちんと想像力を膨らませて入り込める。素直な子どもたちの演技は、こうして多くの皆さんとの向き合いの時間、そして、万感の拍手をもって、彼らの賞賛へと変えていきました。

震災があった、被災したけれども、だけど、僕たちにしかできない取り組み、私たちだからこそやれたこと。震災という体験も付加価値に変える。これが、マイナスからゼロ、そして、ゼロからプラスへの取り組みなのです。

子どもたちは自信を持って、もう2013年には卒業していきました。スカイルームを卒業して、もう学年が３つ上がった子どもたちのなかに、まだやりたい、もっとやりたいと、すごく意欲があった子たちがいたのです。自ら出演を希望した４人の子どもたちと一緒に、『ふしぎな石』撮影しました。同じ映画の物語ですが、「ふしぎ」という字が平仮名です。

そして、少し物語も拡大して、ほかにも大人の人に出演してもらったり、さらに、今回はいよいよ海にも出たりもしたのです。この『ふしぎな石』は、しっかりとパンフレットも出来上がって作品になり、同じように、仙台で９月には上映会を開きました。試写会にはマスコミの人も呼んで、何と、子どもたちは出演の大人たちと一緒に舞台あいさつもやりました。そう、届けるかたち、世の中へ出すということは、表現のかたちがいろいろあるのです。

この映画『ふしぎな石』は、本気で国内外の映画祭に出展しております。これがいつの日か皆さまの元に届き、また賞を取ったあかつきには喜んでいただけたらと思いますし、ぜひ見ていただけたらと思っているのです。

最後に、この紡ぎ出しから表現活動まで、そして、心の整理を終え

て、震災体験すら自信に変えるようなこの取り組み。ユニークな活動ではありますが、この『ふしぎな石』の予告編をご覧いただいて終わりにしたいと思います。

（ビデオ上映）

この心理社会的ケア、心のケアの最終形は、社会との再結合です。被災地に暮らす子どもたち、そして、被災地と世の中をつなぐ取り組み。しっかりと皆が表現したこと、これが一番大事だったのです。映画を通して世界へ、日本中へ。被災地はいまこうなのだ、僕たちはいまこうしているのだ。事実ばかりのデータや、当たり前のドキュメンタリーの報道ばかりではなく、かたちを得た作品となって、これからも表現していっていただけたらと思うのです。

あの日の出来事も、これからの人生を歩んでいくなかで、この世の中で語れないことがないように。そして、行くことができない場所がないように。この出来事も、全て自分自身の人生の物語なのだから。

整理がつくことで、多くの人たちが、また心の自由を取り戻していっていただけること。そして、もしかしたら、まだ苦しんでいる身の回りにいらっしゃる方々のよき聞き手となって。そして、受け止めて、はき出してもらって、元気になってもらえるように。温かく、皆さんとこれからも向き合っていただきたいなと思います。

最後までご清聴いただきありがとうございました。これで終わりたいと思います。

【山崎友子】　ありがとうございました。さまざまな表現活動の重要性、皆さん楽しそうに、身を乗り出して聞いている方も多かったと思います。ありがとうございました。

ご質問は、終了したあとに残っていただくことになっておりますので、そこでお話をなさってください。もう一度、宗貞さまありがとうございました。

それでは、５分間の休憩のあと、パネルディスカッションを始めたいと思います。

＜休憩＞

第 2 部

（討論会）

■ パネルディスカッション「復興の鍵は子ども達にある」

パネリスト：

葉養 正明（埼玉学園大学教授、震災時文部科学省国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長）

佐々木 力也（花巻市立八幡小学校長、震災時田老第一中学校長）

宗貞 研（NICCO、看護師、心理カウンセラー）

村井 旬（震災時田老第一中学校生徒会長、現在盛岡第三高等学校2年生）

コーディネーター：

山崎 憲治（元岩手大学教授）

コメント：

荒谷 栄子（宮古市教育委員会教育委員、震災時田老第三小中学校長）

【山崎憲治】　パネリストの方、壇上のほうにお上がりください。

それでは、第２部のパネルディスカッションに入りたいと思います。私は司会を務めさせていただきます山崎憲治です。実は、私は岩手大学で教員をしておりまして、２年前に退職しました。年齢がもう65歳になったわけです。いまは非常勤で勤めております。

2009年から全学共通教育で、「津波の実際から防災を考える」という授業をやっておりました。この授業は現地に行き、現地に学ぶことを特色としています。3.11以前で

は防災の町田老を中心に、田老に行って、防災のことを勉強しようという授業を展開して参りました。

そのなかで、あとで講評していただく荒谷先生のお母さんの荒谷アイさんや、田畑さんなどのお話や、紙芝居を見せていただく。あるいは、田老の現地の実際に学んで、防災を考えるという授業を展開してきました。

司会／コーデネイター
山崎　憲治

- 岩手大学非常勤講師
- 高年次共通教育で「津波の実際から学ぶ防災教育」を2009年から実施、田老1中との合同の授業を展開
- 『都市型水害と過疎地の水害』（築地書房）
- 『持続可能な社会つくり実践学』（岩手日報）
- 『地域に学ぶ』（二宮書店）

さて、災害というのはどのような事象なのでしょうか。先ほど、司会の方が言いましたけれども、それぞれの地域が持っている問題点や課題が、異常な自然の下で、一気に顕在化するというふうに考えています。ですから、災害を一時の事象としてとらえているのではなくて、長いスパンでトータルに考えてみたいということです。

災害はどうしてもマイナスです。しかしながら、こういった長いスパンで考えることによって災害というものを、先ほど宗貞さんが何度も言っていましたけれども、プラスにする可能性がある。あるいは、そうしなければ、災害が地域をだめにしてしまう。むしろ、災害を契機にして、新しいまちができる、新しい生き方ができるのだという前向きの対応というのが、いま問われているのだろうと思います。

東日本大震災で、岩手県の中学校、小学校で犠牲になった子ども、あるいは教職員は、学校管理下においてですがゼロです。これは誇るべきことだし、また、それをこれからも続けていかなければならないと思います。

学校がすべて安全なところにあったかというと、違います。かなり厳しいところ、海岸から100m以内に立地する学校もあるのです。けれども、組織した力、その発揮によって、危機を回避できた。これは大変

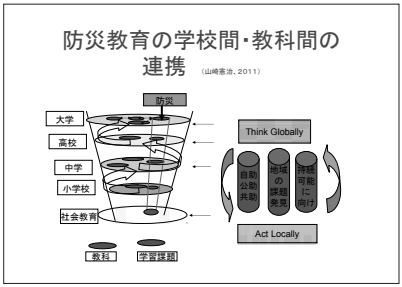
海抜高度・渚からの距離と
激甚被災学校数（岩手県）

渚からの距離

		0～100m未満		100～200m未満		200～500m未満		500～1000m未満		小計	
		中学校	高校校舎	中学校	高校校舎	中学校	高校校舎	中学校	高校校舎	中学校	高校校舎
海抜高度	10m未満	5	4	4	4	5	2	7	2	21	12
	20m未満	5	4	2	0	3	0	10	2	20	6
	30m未満	2	0	5	1	8	1	17	1	30	3
合計		12	8	9	5	16	3	34	5	71	21

＊地形図より特定。「激甚被災学校」とは6月末日現在、他の学校・施設に避難して授業を実施している学校

に意義深いと思います。いま、減災・防災に向けた「力」というものについて、いかにそれを継続するのか、いかに新しくつくっていくのかが、問われていると思います。



現在は、防災教育、減災教育というものが、大学、中学校、小学校、高等学校、地域社会教育全部ばらばらに行われていますが、はたして上手くいくのだろうか。実際に大学生と小学生が一緒に授業を受けることが、あるいは、授業を展開することが可能なのだろうか。皆さんは、このようなものはできないと考えていると思います。

この写真は、震災のあと田老第三小学校でやった授業です。大学生と小学生が一緒に授業を受けているのです。田畑ヨシさんの紙芝居を通してでしたけれども、大学のある学生は、この授業で自分の卒論テーマを変えています。防災に変えているのです。それは大学生にも非常に意味があると思いました。

次の写真は、田老第一中学校で復興あるいは津波の問題に関して、ワークショップをやった様子です。中学生のなかに大学生が混ざり、両者が討論して、その内容を中学生が発表するということをしました。これらの実践例は小学校と大学、大学と中学校が一緒に防災について学び合い、防災教育学習ができることです。これは、非常に意味があることだろうと思います。

そういう意味では、これからも防災あるいは減災に向けての教育というものは、むしろ、小学校、中学校、高校、大学、地域社会が、串刺しで学習を深

めることが必要であり重要だろうと思います。そういった串刺しの教育というものを、いまここでつくられていくということがあれば、大変に意味があると思います。

同時に、そういった教育が地域に結びついて、夢や希望を実現していく力になっていく。そういった方向に進めていけば、このシンポジウムも大変意義深いものになる、今日のディスカッションも意味があると思っております。ぜひ、現場の具体的な声を聞きながら、そして、串刺しの防災教育が実現する方向に、ディスカッションが展開できればと思っております。

それでは、最初に、それぞれの登壇者の方に自己紹介を２分程度で進めていただければと思います。どうぞ、葉養先生よろしくお願いします。

【葉養正明】　葉養と申します。今年の３月まで文部科学省の国立教育政策研究所の部長をやっておりまして、５年前までの27年間は、東京学芸大学で教員養成をやっておりました。現在は、埼玉県川口市にある私立大学で、保育士や幼稚園教諭の養成が中心ですけれども、そういった仕事をしております。

宮古市には、平成18年度から教育委員会の事業に参加し始めました。平成23年３月の震災以降はひと月に１回ぐらい、東日本沿岸部の学校を回ってきました。昨年から、ニュージーランドのクライストチャ

葉養　正明　氏

埼玉学園大学人間学部子ども発達学科教授
震災時　国立教育政策研究所教育政策評価研究部部長

震災前、宮古市教育委員会が津波防災教育に文部科学省のプロジェクトとして取り組まれた際のアドバイザー。専門は教育社会学。東京学芸大学教授を経て、震災時には、文部科学省国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長。震災直後の田老第一中学校入学式に参列し、震災の衝撃とそこに生きる子ども達や先生方の姿にふれる。現在は、東日本大震災の被災校の定点観測、被災パターンなどの調査を踏まえ、学校再建と通学圏域との関係、従前からの動向であった人口減、就学人口減に伴う学校統廃合の動きと被災との関係、学校再建と学校開発との関係、被災した子どものキャリア・パスの研究、子育て・教育システムの整備ビジョンの研究など、震災復興関連の研究を進めている。また、震災復興の定点観測地を海外にも設け、NZクライストチャーチの訪問調査も行っている。

未来を見つめて-自分、家族、地域のあす

葉養　正明
埼玉学園大学
前文部科学省国立教育政策研究所

葉養のプロフィール

- 今年3月まで、文部科学省の国立教育政策研究所の部長。5年前までの27年間は、東京学芸大学で教員養成に携わる。現在は、埼玉県川口市にある私立大学で保育士や幼稚園教諭になる方々の養成の仕事をしています。
- 平成18年度から宮古市の教育委員会と一緒に仕事を始めました。平成23年3月以降は一月に一回程度は東日本沿岸部の学校を回ってきました。昨年から、ニュージーランドのクライストチャーチ市にも出かけています。

ーチにも３回ぐらい出かけておりまして、復興の様子について、どのように日本と状況が違うのかという定点観測作業を進めています。よろしくお願いいたします。

【山崎憲治】　ありがとうございます。それでは、佐々木力也さん、よろしくお願いします。

【佐々木力也】　佐々木力也と申します。現在、花巻市立の八幡小学校の校長をしております。震災当日は、田老第一中学校の１年目の校長職として勤務しておりました。それから３年間、勤務させていただきました。

> **佐々木　力也　氏**
>
> 花巻市立八幡小学校校長
> 震災時　田老第一中学校長
>
> 震災時田老第一中学校長として、最も厳しい震災の衝撃、直後の避難、復旧時の学校再開に当たられた。その後、震災を風化させないことを田老1中の使命と生徒・教職員に呼びかけて、復興の担い手としての一中生の成長を支えた。その考えや教育実践は、『いのち』という作文集に表れている。

ここにある通りですけれども、田老第一中学校の子どもたちから、たくさんのことを学ばせていただきました。先ほどの発表もとても素晴らしかったです。立派だったと思います。

それから、岩手大学の防災教育の先生方のご協力を得まして、『いのち』という作文集を出させていただきました。３回忌にあたる平成25年３月11日に、発行させていただきました。このような冊子になっております。

震災当日の写真を見させていただきたいと思います。これは、翌日３月12日土曜日の朝５時30分に、避難先の田老総合事務所の３階から撮った１枚目の写真です。「津波のあとには必ず雪が降る」という言い伝えどおりの雪になりました。平成22年度の気象庁の10大ニュース

東日本大震災津波
生徒作文集「いのち」

平成23年度在籍
生徒130名分
（現在中3、高1、高2）

平成25年3月11日
発行（三陸塾）

岩手大学防災教育
センター
↓
県内全小中学校
全教育事務所

のトップを飾ったのが、「3.11無情の雪」というものです。ほとんどの方々は溺死（できし）で亡くなったのですが、雪のために、寒さのために凍えて亡くなった人がいると思うと、やはり無情の雪ということではないかと思います。

ここをご覧いただきたいと思います。左上の顔写真は、荒谷アイさんです。荒谷栄子先生が目の前にいらっしゃるのですけれども、お母さまでございます。昭和８年の津波を体験いたしました。

そして、その当時のことをについて、ありのままのことを書きなさいという担任の先生の指示により、歴史に残る『津波』という題で作文を残されました。これは最初に発刊されたものなのですが、吉村昭さんの『海の壁』に収録されています。現在は書名が変わりまして、『三陸海岸大津波』といいます。ここに載っております。

その当時の先生がここにいます。佐々木耕助先生という先生でありまして、私の父のおじにあたる人です。震災は昭和８年３月３日だったのですが、その新しい年度になってから、この佐々木耕助先生が６年生の担任になったのです。震災から約９カ月後の12月に荒谷さんに向かって、「ありのままを作文に書きなさい」というような指示をしたそうです。

私は、この生徒作文集『いのち』の作文集を発刊するにあたって非常に迷いました。はたして、こういう作文の価値があるのかどうか。それについて、荒谷栄子先生から「このような作文はいつか誰かの役に立つ」というアイさんのメッセージを伝えていただきました。非常に大きな勇気をいただき、この作文を刊行させていただいたということであります。

以上です。よろしくお願いします。

【山崎憲治】　では、宗貞さん。

【宗貞　研】　私はスライドのほうは用意していないです。先ほどお話をさせていただく際に、ご紹介いただきました。

私は看護師でもありまして、３月18日から宮城県名取市を中心に活動をして参りました。２年半余り名取にいまして、子どもたち、そして地域に暮らす大人たちとの心理社会的ケアを中心に、さまざまな活動をやって参りました。

今年度は、こうした講演活動やさまざまなかたちで、全国へこの震災のこと、そこに生きる人々のことを伝えさせていただいております。「むねさん」と覚えていただければありがたいです。先ほど廊下に出ましたら、ロビーに団体紹介のパンフレットが大量に余っておりました。非常にさびしくも思います。ぜひ、言葉で足りない部分は、その資料なども置いてありますので、映画のこともたくさん載っております。お帰りの際には、持ち帰っていただけたらと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

宗貞　研　氏

- 職業：看護師、心理カウンセラー、心理社会的ケア担当
- 所属：公益社団法人　日本国際民間協力会（NICCO）

- 震災直後の2011年3月18日より宮城県名取市と岩手県陸前高田市において災害時緊急医療支援に従事。被災地での24時間診療や避難所への毎日の巡回診療などに参加。2011年5月末から名取市の現地NPO法人「地球のステージ」と共同実施で、名取市ゆり上地区、下増田地区の子ども達の心のケアのため「スカイルーム」心理社会的ワークショップのファシリテータ-として、2013年4月まで従事。「むねさん」の愛称。
  現在も、名取市での活動を継続。東北各地での心理社会的ケア研修セミナーの開催、全国へ震災と心理社会的ケアを伝える講演活動等、様々な支援活動に取り組んでいる。

【山崎憲治】　ありがとうございます。それでは、村井くん。当時の田老一中の生徒会長です。

【村井　旬】　村井旬と申します。いまは盛岡第三高校、ここから一番近い高校に在学しています。現在２年生です。

震災当時は田老第一中学校の２年生でした。2011年の３月、ちょう

村井　旬　さん

盛岡第三高等学校　2年生
震災時　田老第一中学校2年生　生徒会長

震災後、すぐに3年生となり、瓦礫の中で迎えた入学式では、新入生歓迎の言葉を述べた。その中での**「津波を忘れてもいけないし、引きずってもいけない」**という言葉は、新入生ばかりでなく大人達に現実を直視し前へ進む勇気を与えてくれ、朝日新聞全国版の教育のコラムで紹介されたり、『おばあちゃんの紙しばい　つなみ』にも掲載された。現在は、盛岡で一人暮らしをしながら高校に通い、週末は宮古へ戻り、NPO「みやっこベース」で復興に向けての活動をしている。

ど２年生の終わりのときで生徒会長をしていました。

現在は本当に、２年間のプロフィールなどは持っていないのですけれども、いまは宮古へ月に２回ほど帰っていて、宮古のために何かできないかということで「みやっこベース」という、地域貢献団体のような活動をしております。現在は観光のためのマップを作成しています。12月に発行なので、ぜひよろしくお願いします。

【山崎憲治】　ありがとうございます。

それでは、皆さんに3.11の当日にどういうことが、この田老一中で起こったのかというところからディスカッションに入っていきたいと思います。田老一中の当時校長だった佐々木さん、実際はどうだったか、あるいは校長としてどういった迷いがあったのか、というところも含めて少しお話をしていただきたいと思います。

【佐々木力也】　それでは、また資料をつくっておりますのでご覧ください。事実だけをお話したいと思います。本校は平成17年度に、新しい宮古市になりました。田老が合併されて大きな町になったわけなのですが、その年に教育委員会のほうから、津波シェルターの指定を受けたわけです。

また、以前は宮古市のほうから、第二避難所扱いにされておりました。明治29年や昭和８年の津波など、ここまで瓦礫が押し寄せたというような津波はこれまでありません。初めての経験だったわけです。

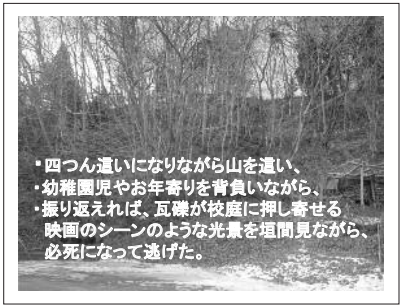
これが校庭です。3.11の当日のことをお話ししたいと思います。２時46分、大きな地震がありました。避難訓練の成果がありまして、すぐに校庭に参集することができました。当時生徒129名、７人の欠席。122名と先生方が17名。翌日は卒業式だったものですから、１年生、２年生は体育館で卒

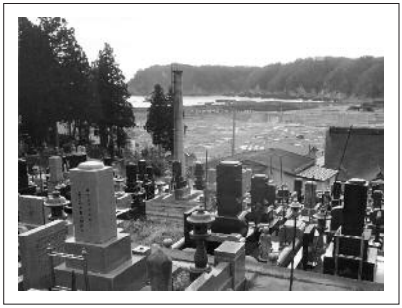
業式の最終的な合唱の練習をやっております。３年生は最後の授業を行っておりました。

そして、ここに集まったわけですが、すべて情報は遮断されたわけです。３時10分までは様子をみましょうというようなことで、様子をうかがっておりました。ラジオを聞くこともできません。何も情報手段がなかったわけです。子どもたちは、特に３年生の卒業生は学ランを着ており、ジャンパーなどは着てはいません。寒さのなかで震えて、教室に戻ってジャンパーを取りに行こうと思ったのですが、その瞬間にまた余震が多くなりまして、教室までたどり着けないままに、また校庭に戻ったり。「だめだ、だめだ」と、「３時30分まで待ちましょう」となりました。

そのときに、田老湾に水柱がぽんと立ったのです。水柱というのは噴水のようなもの。かたちは東京スカイツリーのようなものです。それを発見した私たちは、琴畑さんという用務員さんの「津波だ。逃げろ」という声で全員が逃げ始めました。

私たちは山側、つまり高台を目指して、全員が四つん這いになりながら、この赤沼山を目指して走って



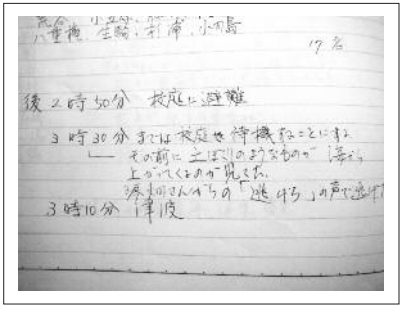


行って逃げました。

津波を見ながら、瓦礫の流れを見ながら、行き着いた先は、ここの常運寺というお寺です。人数確認をしたところ20人足りない。私はクビになるのではないかと思いました。

実は何人かの生徒たち、野球部とサッカー部の子どもたちは、こちらのほうのルートを通って後ろ側から逃げたわけです。これも非常に主体的に判断をして、最終的に田老第一小学校の方に逃げた。捜索をして全員が無事であることを確かめるまでには、１時間半ぐらいを要しました。４時間半ごろまでかかって、最終的には田老総合事務所から「こちらに戻って、今日は一泊をしてください」との指示があり、全員３階に行って寝泊まりしたということであります。

これが当時の副校長先生が、新しいノートにメモした中身です。副校長先生は、「土ぼこりのような」というような記載をしていますが、これが私の言う例の水柱のことであります。そして、「逃げろ」との声で逃げた。３時10分津波、これは水柱が立ち登った時刻ということです。校庭の端にまで到達したのが３時30分ですから、20分間ぐらいかけてゆっくりと津波が動いたということであります。



それから、夜の７時には私のほうから生徒にお話をしました。また、５人に一枚の毛布と、３人に一個のおにぎりが支給されました。そし

て、棒状になって、一睡もできませんでしたけれども、一晩夜を明かしました。

先生方についても、ほとんどが宮古市内から来ておりましたので、自分の家がどうなっているのかという心配もあります。16km離れた宮古市内まで三陸鉄道の線路を通って、何も持たない、つまり明かりも何もないままに４時間、５時間かけて宮古市内に戻りました。私と副校長、また田老にいる先生方が何人かそこに残り、最終的には、うちに帰ることができなかった生徒10名ほどが、そこから避難所生活を始めました。だいたい１週間から10日は、そのようなかたちで過ごしました。

簡単ではございますが、当日の話をさせていただきました。

【山崎憲治】　では、反対に生徒の側からみると、その当時どうだったのか。村井くん、お願いします。

２

2011年3月11日

宮古市立田老第一中学校では何が起きたか

佐々木力也氏、村井旬さん

【村井　旬】　先ほど、お墓のほうと、もう一つ、体育館の裏側のほうに逃げた道があったのですけれども、その少数の二十数名のほうに避難していました。心配をかけていました。私の感情も含めて説明します。

校庭から生徒が赤沼山へ逃げたルート
校庭には生徒だけなくもう一団がいた
（筆者撮影　2011年6月12日）

震災当日は山をかけ上がったのです。道のないところ。そして、この体育館の裏に広がる、緑の山のところを駆け上がっていました。それ

で、全員が集まったのが先ほどもあった、総合事務所ですけれども、このときの感動というか、初めて自分の命と向き合って、初めてほかの人のありがたさを感じられた機会になりました。

そして、その夜におにぎりと水と毛布が支給されたのですが、全員に渡るわけもなく、ほかに避難している方もいたので。田老一中生だけで、ある分を分けました。おにぎりも1/3個とかで、水もコップの本当に少しだけという感じなのですが、そのときには、本当においしく感じたし、水もこんなにありがたいものだったということを感じました。

男子生徒は女子生徒に毛布を譲って、段ボールやビニール袋で暖を取っている人もいました。そして、僕がもっと感銘を受けたのは、先生方が少しのスペースに雑魚寝状態になってくれたので、生徒は全員寝ることができたのですけれども、先生はちゃんと休むこともできずにいました。しかも、まだ余震が続いているなかなので誰一人寝ることがなく、ずっと私たちを見守ってくれていました。その姿を見て、すごく感動を受けました。

3

記憶を確実なものとし
それを表現し
伝えることとは

宗貞氏、村井さん、佐々木氏、葉養氏

【山崎憲治】　ありがとうございます。生きるということ、あるいは何とか食べる、飲むことができることで、そのありがたさが実際にわかるという、そういう体験、経験をしたと思います。

そういう生きることに直接向き合うなかで記憶・記録したこと、それを表現して伝えることというのは、どういうことなのか。先ほどの宗貞さんの活動と、つながっていくと思います。まず、口火を宗貞さんに切ってもらい、そして、村井くん、佐々木さん、最後に葉養さんという順で、このことに関して話をしていただきたいと思います。

【宗貞　研】　あの日の出来事は、実は皆さん、それぞれ違う体験だったりもします。震災、津波、地震と言っても、一言で片付けられるものではな

い。それぞれが覚えているものや、心に刻まれているものもさまざまなので、先ほどもお話しした通り、まさに心の病の防止にはなります。

心の病、ＰＴＳＤは記憶の病とも言われております。ボロボロに抜け落ちた、バラバラになった記憶。ときに感情も含めて、セットで時系列に並べていくこと、それが語りなのです。

田老一中の皆さん、村井くん、校長先生にお話をいただいたように、あの日の出来事を自分はどうしていたのか。その後、どう生きてきたのか。しっかりと紡ぎ出すことが心のケアにもなりますし、それが人の命を救うための取り組みと、先ほどからも多く出ている通り、やはり共感できるものかと思います。

【山崎憲治】　ありがとうございます。それでは、村井くん、作文を書くということに関わって、どうでしょうか。

【村井　旬】　一人一人表現するということ。一人一人が語りのある語り部といっても、一人一人で感じることは違うし、一人一人が体験したことは違うので、一人一人がそれぞれのストーリーを語るということは、とても大事なことだと思うし、聞いている人にもとても伝わると思います。

もちろん、つらい人もいると思うのですが、語ることによって新しい自分のなかでの感情や、発見などもあります。僕の場合は内陸の高校に来て、周りで震災を体験した人もあまりいなかったので、正直、自分の震災に対しての思いというのを、語る場所がなかったのです。そういうポジションに行ったために、僕はどちらかと言うと語って、すっきりしたいと思いました。

【山崎憲治】　佐々木先生、いわば大変な軋轢のなかで、この作文集をつくられ、あるいは、ボイジャーをつくっていくとなったわけです。いまのような表現をされていることについて、どのように校長としてお考えになったのでしょうか。

【佐々木力也】　ここに、簡単に意図をまとめさせていただけました。この

通りなのですが、１つ目はやはり記録をしっかり残すというような意味があるのではないかと思います。

それから２つ目に私は、学校の責務というように書いたわけですが、田老はさまざまな震災を経験した町です。その震災の町に生きている子どもたちにも、震災で学んだことを後世に残すというような意味があるのではないか。これは学校教育としての責任もあるのではないか、というぐらいまで私は感じました。

作文指導の意図

- 被災者の視点からの多様で詳細な震災の記録を後世に残す
- 学校の責務
- 子どもの心のケア（表現活動を通した心の整理、心を強くする活動）
- 活動を通して、生徒と指導者との信頼関係が深まり、互いの共感に基づく協力体制作り
- 自分の命を守る力、家族や友だちの命を守る力の育成

３点目は、これは言っていいかどうかわからないのですが、心のケアそのものなのではないかと感じました。心を強くする活動というように、少し強めの表現をさせていただいたわけなのですが、これは実はいくつかの中身があります。私はいまだからお話をするのですが、私は亡くなった人たちへの感謝であり、慰霊であり、そしてまた、これから強く生きていこうというような決意というものが、作文のなかに刻み込まれて、それを基にしながら心を強くすることができればいいという願いを、実は託していたわけです。

また、４点目にありますけれども、この活動を通して生徒と指導者との信頼関係が深まっていけばいいということ。そして、最終的には自分の「いのち」を守る。そしてまた、友だちや家族のいのちを支えたり、守ったりする力を育成することができればいいというような願いを、私は感じました。以上です。

【山崎憲治】　葉養先生、いかがでしょう。

【葉養正明】　一つこの問題に関係してお話をすると、クライストチャーチには３回も行っていまして、２回目に行ったときに、陸前高田が故郷の女の子に会ったのです。女の子といっても、もう大学１年生です。彼女はお父さんがニュージーランドの人で、お母さんが陸前高田の方です。クライストチャーチでは、２月22日に大きな地震が起きています。それで、住んでいる

ところが壊れて陸前高田に戻って来たら、３月11日に震災が起こって、彼女は親せきがいる大阪に引っ越しました。

そのあと、またクライストチャーチに戻ってきていてお会いしたのですけれども、やはり、震災を受けた人が自分のなかに震災というものを、どのように消化しているか、彼女を見て非常に強くなったと思ったのです。自分の生き方や、強さを非常に感じたのです。非常にかわいらしい、すてきな女性なのですが。ですから皆さんも、中学生の立場でいったら日常的な自分が、他人から見ると非常に強くなったと見えるということが、一番基本的な表現するということではないかと思うのです。

【山崎憲治】　自らが表現活動によって強くなるという、そのところを強調されました。

さて、復興に関る学校教育や学習について、それぞれの立場からお考えになっているところをお話していただければと思います。口火を切っていただくのは、また宗貞さんはどうでしょうか。

4

復興にかかわる
学校・教育・学習

登壇者全員

【宗貞　研】　やはり、この田老一中の取り組みをはじめとして震災を体験した人たち、または大切な人を亡くした人たちなど、被災者の方々の復興の心のケアです。復興に向けた取り組みというのは、まさに心のケアとセットです。

大事なことは、まず当事者の人たち、同じ境遇の人間が集まって分かち合う、共有するということ。これは非常に大事な取り組みだと思っています。個人ではなかなか難しいけれども、皆とだったら取り組みやすいのです。

また、体験をわかってくれる人がいる、そういう温かい会のなかでは、ケアとしても非常に取り組みやすいと思います。医療の専門にかかるのは、また別です。学校、組織、地域でやるときには、それを重んじてやっていただくことは非常に大事かと思います。

【山崎憲治】　共有するということは非常に重要だということですが、ほかにどうでしょうか。佐々木先生は、この問題に関してはどういうような考えをお持ちでしょうか。短い時間で、５分ほどでお願いします。

【佐々木力也】　何点か、少しだけお話をしたいと思います。花巻市では宮沢賢治の没後80周年ということで、さまざまなイベントが催されております。これは宮沢賢治が残した言葉の一つですが、「かなしみはちからに」というところが、とても気に入っております。これは学校経営の一つの礎にしていきたいと、考えるようになりました。

これからの学校教育
- 「自他のいのちを守る力」の育成
- 立志の教育「岩手のひとづくり」
- 亡くなった人たちへの慰霊・感謝・誓い（悲しみを力にすること）
- 学校現場では「命てんでんこ」に非ず（３．１１の教訓）

言いたいことを４点ほどにまとめました。

一つは、やはり学校経営のなかで最も大切なのは、私は「いのち」なのでないかと思います。いのちというのは、生きるか死ぬかのいのちも含まれるのですが、いのちを構成する気持ちというものも、大事だと言えるのではないかと思います。自分のいのちを大切にする。ほかの人たちのいのちも大切にするということが、やはり学校経営のなかで最も大切ではないかと思います。

それから、２つ目は岩手の人づくりのために、いま、復興教育をどの学校も行っているわけです。その中核は何といっても子どもたちに、夢とか希望を持たせるということではないかと思います。

３点目は、これは学校教育のなかでは出来ないかもしれません。でも、今日の開催行事の前に、私は久々に黙とうをやらせていただきました。あのような活動を年に一回、できれば命日にあたる日に、私はやったほうがいいの

ではないかと思います。そのことによって、亡くなった人たちへの慰霊や、感謝や、誓い。まさに、悲しみを力にするパワーが湧き起こってくるのではないかと、強く私は感じております。

それから、「命てんでんこ」。私は学校現場では「命てんでんこ」に非ずという、大切な教訓を得ることができました。やはり、学校現場は子どもたち一人一人、まるごと守っていかないとならないという立場にありますから。

それから、もう一つ、ここに書いていないのですが、今日も田老第一中学校の生徒、それから先生方のご発表のなかで感じたことは、過去を語ることが、とても大切です。語り継ぐということが大切です。もう一つは、未来を語ることが大切なのではないかと、私はいま感じております。以上です。

【山崎憲治】　ありがとうございます。それでは葉養先生、いかがでしょう。

これまでの2年9か月考えてきたこと

- どうすれば「希望のまち」を取り戻せるか
- どうすれば、少子高齢化のまちを「希望のまち」に変えられるか
- 「希望のまち」を支えるものは？
  産業基盤、ハリと安らぎのある生活、たくましさ、仲間を大切にするひとびと、教育や福祉の施設やプログラム
- 10年後の未来の成人：中学生への期待

【葉養正明】　もう生徒さんがお帰りになる時間なので…。田老の町は何回も行っていますけれども、「希望のまち」というテーマがあった。田老の町を希望のまちとするにはどうしたらいいか。生徒さんが、もっとまちづくりのなかにコミットするべきだという感じがします。

皆さんは、あと10年もすれば成人になるのです。一介の大人になるわけで、皆さんが、やはり田老の町を背負っていくのです。小さい子や、お年寄りにとって住みよい町というのは何かという原点を考えながら（学校のなかで相当やっているのだろうと思うのですが）、希望のまちづく

りという問題に主体的に取り組む機会とか、あるいはアイデアを出し合うとか、そういうことが非常に大事なのではないかなと思います。

それから、人口減少社会というのは、日本全体の状況なのです。人口減少に苦しむことになる全国各地にとって、新しい希望を田老の皆さんの企てにより、非常に明るい先を見いだすということがあるのではないか思う。せっかくの皆さんの、ある意味で非常に重要な体験を潜り抜けているので、それを生かすようなことを、是非やってほしいと思います。

「希望のまち」の像を描こう

・ちいさな子ども、お年寄りにとって住みよいまちとは？
・田老のみんなにとっての「希望のまち：田老」とはどのようなもの？
・まちづくりに生徒も参加しよう。

いのちとは、生きるとは、希望を抱くとは、という原点を見つめる

・宮古市は、日本の未来を先取りしている。
・「希望のまち」づくりを日本全体に発信しよう！

5

未来に向けて

葉養氏、村井さん、宗貞氏、佐々木氏

【山崎憲治】　葉養先生には、最後のテーマの「未来に向けて」というところに話を移していただきました。ありがとうございました。

まさにそういう課題を、いま、子どもたちに向けて提起し、私たちも元気づけないといけないと思います。佐々木先生、この「未来に向けて」に関していかがでしょうか。

【佐々木力也】　震災のことをいっぱい学んだのではないかと思いますので、それは、これから世の中で定期的にと言いましょうか、時期を得たときには当然、語らなくてはならない状況下になると思います。そのときには、もう正々堂々と思いきって語る部分は語るということが大切だと思います。できれば、さまざまな言語を使って世界中に発信できるような力も、将来身

につけていただければと私は願っています。

それからもう一つは、何といっても、未来を生きるために、子どもたちは挑んでいます。いろいろな方々が、さまざまなかたちで風化を阻止するような活動をされているわけなのですが、10年経ち20年間経てば、やはりバトンタッチをせざるを得ないわけです。いまの中学生、それから高校生。当時、中学３年生で震災を経験した人が、いまは高校３年生になるわけです。

来年になって４カ月すれば、もう社会に出るということです。そのような意味では、実はこれから私たちは岩手や日本の復興に向けた若い力の、恩恵にあずかりながら生きていかなければならない。そのような願いのなかで考えていきますと、やはり、子どもたちに頑張ってもらいたいし、それぞれが夢そして希望をぜひ実現していただきたい。どんな領域でもいいですから、ぜひ岩手の復興のために頑張っていただきたい。それがしっかりできるのであれば、学力だって向上していくのではないか。私はそう思っています。

【山崎憲治】　若い子の代表として村井くん、どうでしょうか。君がよく宮古に戻るというところから、おそらく地域ということを考えているのだろうと思いますが。

【村井　旬】　私たち学生ができることで復興とか、直接的にできることはすごく少ないし、できたとしても、すごく小さいパワーだと思うのです。私たちは被災地で活動することに、意味があるのではないかと思っています。その活動している姿から発せられるエネルギーはすごく、きらきらしていると思うのです。だから、私たち被災地の学生として、前を向いて歩いて行く姿を、たくさんの人に見せていけたらいいのではないかと思います。

【山崎憲治】　子どもたちの元気というのが、被災地の高齢者に与えるパワーにもなっていく。高齢者はそのパワーを得ることによって、また子どもたちに力を返していく。そういう循環はとても重要だろうと思います。

宗貞さん、最後に一言どうでしょう。未来図について。

【宗貞　研】　僕はもう出来ていると思います。あの当時の子どもたちは、庇われる、保護されるような立場でもありました。だけど彼ら自身が、その避難所を明るくしたり、物資配布に活躍したり、大人の人たちが動けずとも、集団、チーム、仲間というものが大きく機能しました。同時に、見ていただいてわかる通り、子どもたち自身の発信は世の中の人の心に、どれだけ届くものなのか。その語りとして紡ぎ出したものが、いずれ後世へと、世の中へ広く届いていくのには、表現のかたちはさまざまだと思っています。創造があれば、遊び心もあってもいい。まじめにやらなくてもいい。部活でやって、「おれ、被災地出身だぜ」と言ってもいいのです。

皆が自分の思い思いで胸を張って、これから生きていくこと。そして、それを支える大人たち。大人たちも頑張っています。子どもたち、ごめんね。

復興庁だって、何千億円を変なことに使ってる」だったり、「１年経ったって、２年経ったって、復興は進んでいないじゃん」と子どもたちは言うのです。

そうです。私たち大人は復興と声高に叫ぶけれど、実現できていないことだって多い。だからこそ自分たちの思っていることを、今日みたいにたくさん出していいのだと思います。子どもに何でこんなことさせるのと、反対する人たちもたくさんいるかもしれません。

それこそ、この資料をまとめるにあたって、職員室並びに教育委員会も含めて葛藤はさまざまあったことでしょう。でも、もういま２年８カ月、３年目。いま伏せている場合ではないのです。もういま立ち上がって乗り越えていき、そして被災地からしっかりと世の中に向けて、そして世の中から訪れる人たちを受け止めていく作業というのは、子どもも、大人も関係なく、まちぐるみで皆やっていくことかなと思います。

まとめ

コーディネーター
山崎　憲治

【山崎憲治】　ありがとうございます。

災害文化という言葉が、このディ

スカッション、あるいは今日のこの集会のなかで、確実に定着してきたと思います。新しい社会をつくるうえで、この災害文化というものをもう少し私たちは焦点を当て、そして育てていく必要があると思います。

今日のパネルディスカッション、最後に荒谷先生から講評というかたちで、閉めたいと思います。

３時半になりました。帰りのバスの関係で、田老一中生諸君が退席するとのことです。

【山崎友子】　田老一中の皆さん、本当にありがとうございました。荒谷先生のコメントはあとで確実にお手紙にして送ります。

それでは、本当に今日は力強い声を届けてくださってありがとうございました。皆さん、拍手で送ってください。

（会場から拍手が起きる）

では、田老一中生の皆さん、学生が案内しますのでバスのほうへ向かってください。また、元気でいてください。

区界は雪だったそうですけれども、本当に遠くからありがとうございました。

（田老第一中学校生、退席）

【山崎憲治】　それでは、荒谷先生、お願いします。

【荒谷栄子】　荒谷でございます。私にはいろいろな顔があります。まず、私の出身地は田老の町でございます。先ほど発表した田老一中生

は、私の後輩になります。私は大先輩になると思います。

母校の子どもたちが、このような素晴らしい、命を輝かせる活動をしてくれていることを誇りに思って、先ほどから涙をこらえながら見ておりました。本当にうれしいものだなと思います。

コメント：荒谷栄子氏

宮古市教育委員
震災時　田老第三小中学校校長
母　牧野アイさん（昭和8年の大津波の際、小学校5年生。孤児となる。その体験を小学校6年で綴った作文「つなみ」は、歴史作家吉村昭の目にとまり、『三陸海岸大津波』に所収され、全国の多くの人々に津波の悲惨さとその脅威に対する警戒を教える啓蒙の書となっている。）

私は今年３月31日で、無事に定年退職を迎えました。現在は、宮古市教育委員会の教育委員を８月の末から務めています。まだ、仕事には慣れないのですけれども、教育委員ということで、被災地宮古・田老の子どもたちと接していけると思います。それは、すごく喜びとして、はりきっている部分でもございます。

もう一つ、先ほどから荒谷アイという名前が出ているのですけれども、荒谷アイ、旧姓牧野アイ。いまは亡くなりましたけれども、作家の吉村昭さんの『三陸海岸大津波』のなかに紹介されています、『つなみ』という作文を書いた母の娘です。田畑ヨシさんもよくご存じだと思います。そういういろいろな顔を持っていますが、今日のこの会で感じたことを、いくつかお話ししたいと思います。

まず、田老一中生の発表が素晴らしかったと思います。岩手の教育では、復興教育が叫ばれているわけですが、本当に生きた復興教育です。これの基礎を築いた佐々木力也校長先生に拍手を送りたいと思いますし、現在の菅井校長先生に、上手にバトンタッチされていると思います。

私も退職したわけですが、学校経営をバトンタッチするというのは、簡単なようでなかなか難しいところがあるのです。でも、この大事な部分は上手にバトンタッチされたなと思って、力也先生と菅井先生の素晴らしい引き継ぎに拍手を送りたいと思っております。

次に、今日ここで感じたことは、やはり大事なのは「いのち」だということです。田老一中生に、村井くんにもそうですけれども、若い人たちに伝えたいことは、どんな災害があるか全くわからない時代に入ってきたと思いま

すので、とにかくいのちを大切にする。そして、若いいのちをぜひ輝かせてほしいと思います。村井くんにもいろいろ夢があるようですので、どうぞ一日一日を大切に、いのちを輝かせて自分の夢に向かって頑張っていただきたいなと思います。

それから、震災から２年、もう少しで３年が過ぎるわけですが、忘れないための努力が本当に大切というか、風化防止の戦いが始まっているのではないかと思います。一人一人が使命感を持って、忘れないで伝える。伝える。伝える。ヨシさんのように紙芝居で伝える、それから、田老一中生のように体験と活動を通して伝える。

私は在職中に、毎月11日を防災の日として、子どもたちと一緒に向かい合ってきました。そういう地道な活動を定期的に行いながら伝える。記録を残したり、田老一中のボイジャーだったり、とにかく忘れないための努力が、本当に大事な時期になってきていると思います。

次に、復興力は、やはり子どもです。またいつか、三陸海岸に津波が押し寄せて来るかわからない。必ず押し寄せると思います。それが例えば30年後だとして、村井くん、30年後は何歳ですか。

【村井　旬】　47歳です。

【荒谷栄子】　47歳、若いね。私は92歳になっています。そのときに赤沼山に逃げろといっても、やはりすっと逃げられるのは若い子たちです。私は一人で逃げることが大変な歳になっていると思います。やはり高台に住むとか、子どもたちがいろいろまちづくりを考えたりするときもあるようです。とにかく復興力は子どもにあると思いますので、田老一中生にもいつかお話ししたいと思っているのですけれども、そういうことも大事にしていきたいと思います。

最後に、母のことも少しお話したいと思います。今日この場に、出来れば連れて来たかったという気がしています。本当に素晴らしい母親です。92歳になりました。足腰は弱って車いすの生活ではあるのですけれども、あまりぼけることもなく元気に過ごしております。

昭和８年の大津波で、８人家族だった母は、家族７人を亡くして、一人だけ残った人です。11歳のときでした。おじいさんが亡くなり、両親が亡くなり、おばさん、妹シズコちゃんとセンちゃん、弟のソウキチ。一気に津波で亡くなりました。

母、アイは、本当に苦労した人間だと思います。この吉村昭さんの本の中で紹介されていますので、出来れば読んでいただければと思います。

この作文の指導をしたのが、佐々木力也先生のご親戚にあたる佐々木耕助先生です。耕助先生は、津波について「思ったこと、見たこと、感じたことを、ありのままを書きなさい」、ただそれだけの言葉だったそうです。田老の子どもたちは、一生懸命書いたそうです。今から80年前のことです――。

牧野アイさんと佐々木耕助先生

母の作文は、私が読んでも非常に悲しみが滲み過ぎて、つらい部分はあるのですけれども、本当に素直な言葉で書いているのです。ときどき、「母さん、この作文本当にあなたが書いたの？耕助先生は、どういう指導だったの？」と聞くのです。そうすると、「一字一句自分の言葉だと。耕助先生は書き直してくれなかった」と。ただ、いつも側にいて、見守っていてくれたので、安心して書いたような気がする。だから教師というのは、やはり子どもに寄り添っていていいのだなというのも、耕助先生から教えられた部分なのです。

母を92歳のいままで支えてきたものは、目標をいつも持っていたからだそうです。津波で家族を亡くして一人になったときは、亡くなった家族のお墓をつくるとか、一生懸命拝むとか、そういう目標。そして親戚のおじの家を転々として、北海道の根室のおじのところで５年間過ごすわけですが、根室に行ったときも、田老に帰りたい、田老に帰るという目標があったそうです。

そして田老に帰って来て、目標を達成し、結婚して、６人の子どもに恵まれるのですけれども、その６人の子どもを立派に育てる、教育を受けさせる

という目標があったそうです。私たち６人兄弟のうち４人は、教職に就くことができました。やはり母のおかげだったと思います。

子どもを育てあげて、いま二人で家に住んでいるのですが、「かあさん、いまの目標は何？もう全部目標達成したから、あとはいいじゃないの、のんびり」と言うのですけれども、「そういうわけにはいかない。いままで92年間生きてきたのは、いろんな人に支えてもらったから」と。家族だったり、親戚だったり。「たくさんの日本中の人たちから助けてもらったので、これからは感謝の気持ちを届けなきゃない」と。そういう新たな目標に向かって、日々生活しています。

そういう母と毎日過ごしていて感じることは、本当の親子の関係ですけれども、私は神様から大切なものをあずけられているような感じがしています。また、一人の女性の生き方として、いろいろ学んだりしているところです。

つたない話になりましたけれども、今日こうやって、本当にいい時間だったと思うのです。どうぞ皆さんお帰りになったら、近所の人たちに「今日のフォーラムよかったよ。こうだったよ」というのを、いっぱい広げていただければ、さらにまた、いろいろなたくさんの人たちの関心が広がっていって、一つの風化予防になるのかなと思っております。お帰りになったら、ぜひ、皆さんに教えていただければと思います。

最後に、本当に山崎憲治先生と友子先生には、個人的にも、田老のためにも、宮古のためにもいろいろ力を尽くしていただきました。どうやって感謝したらいいのかと思います。お元気でこれからもよろしくお願いしたいと思います。

以上です。

【山崎憲治】　ありがとうございました。このようなかたちで、パネルディスカッションを閉じたいと思います。

ともに生きるということ、そして教育が復興の鍵になっているということをお互いに共有して、明日の社会をつくることに焦点を当てたいと思っております。

本当に今日はありがとうございました。
それでは、次の方にバトンタッチします。

【山崎友子】　パネリストの皆さま、ありがとうございました。
時間が少なくて、もっともっとお話になりたいところがあったかと思います。このあとの懇談のところで、どうぞよろしくお願いいたします。
それでは次は、この地域防災研究センター立ち上げの際のフォーラムで、特別講演を行ってくださった、作家の柳田邦男さんからメッセージをいただきました。災害文化部門長の越野より代読させていただきます。

■ 特別メッセージ
―2.5人称で語り、１人称で築く―

柳　田　邦　男（作家）
代読：越野修三（岩手大学地域防災研究センター教授）

【越野修三】　どうも皆さん、こんにちは。
ただいまありましたように、昨年７月の第１回地域防災フォーラムのときに、特別講演をしていただいた柳田邦男さんから、「2.5人称で語り、１人称で築く」という特別メッセージをいただいておりますので、代読いたします。

「私は、第１回フォーラムで、行政や専門家が被災者に寄り添う2.5人称で語る意味を問いました。いま、復興期に入り、被災者住民自身が１人称で語れる地域を取り戻すことが、きわめて重要だと実感しております。復興は、住民が自らの街をつくることなの

ですから。そして、とりわけ大切なのは、子どもたちが夢を描き、それを実現できるよう大人も共に追求することです。

未来に向けて、子どもの夢の実現は、社会の希望につながります。その実現は、教育の力によります。教育の果たす役割は、極めて大きいのです。

震災を体験した子どもは、復興によって大きく成長する能力を持っています。震災は、大人が解決していない課題を明らかにしました。いま、子どもならではの感性で、その課題を克服する可能性が、子ども達の前にあります。危機を逆手に取ってチャンスにしていくこともできるのです。未来を築け、子ども達の力で！」。

柳田邦男さんから特別メッセージ

２．５人称で語り、１人称で築く：

私は第１回フォーラムで、行政や専門家が被災者に寄り添う２．５人称で語る意味を問いました。今、復興期に入り、被災者、住民自身が１人称で語れる地域を取り戻すことが、極めて重要だと実感しています。復興は住民が自らの街を作ることなのですから。そして、とりわけ大切なのは、子ども達が夢を描き、それを実現できるよう大人も共に追及することです。未来に向けて、子どもの夢の実現は社会の希望に繋がります。その実現は「教育の力によります」。教育の果たす役割は極めて大きいのです。震災を体験した子どもは復興によって大きく成長する能力を持っています。震災は、大人が解決していない課題を明らかにしました。今子どもならではの感性で、その課題を克服する可能性が子ども達の前にあります。危機を逆手に取って、チャンスにしていくこともできるのです。未来を築け、子ども達の力で！

子どもたちの可能性と、子どもたちへの期待を込めたメッセージでした。本当にありがたいと思います。ありがとうございます。

【山崎友子】　東京にいらっしゃる柳田邦男さんに、感謝申し上げたいと思います。

それでは、プログラムの最後になりました。先ほどのパネリストの一人である村井旬くん、向こうのほうによろしいですか。

被災地からの「宣言―未来を築く被災地の子どもの声」ということで、村井旬くんに宣言文を読んでもらいます。英文もあります。皆さんのお手元にこの文があると思いますが、日本語と英文があります。英文は本学のジェームズ・ホール准教授が英訳をしてくれました。村井くんが読んでくれます。どうぞよろしくお願いします。

■ 宣言
―未来を築く被災地の子どもの声―

村　井　　旬（前掲）
英訳：James Hall（教育学部准教授）

【村井　旬】　宣言、未来を築く被災地の子どもの声。

田老は青い空が広がり、青い海と緑の山に囲まれている。
歴史とともに生きている
田老は、私達に安らぎを与えた。
　　私達に試練を与えた。
　　私達に可能性を与えている。
豊かな自然が私達の味方だ。
子どもの思いと声が生きる“ふるさと”を、
被災地の仲間とともに作っていこう
三陸が日本の理想になる時代を作っていこう。

宣言：未来を築く被災地の子どもの声
村井　旬

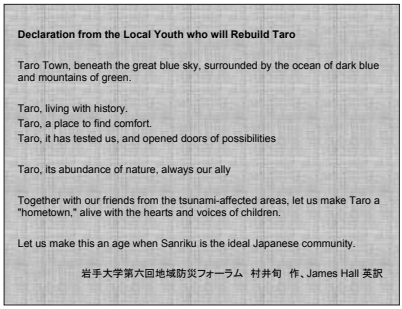
田老は青い空が広がり、青い海と緑の山に囲まれている。
歴史とともに生きている
田老は、私達に安らぎを与えた。
　　私達に試練を与えた。
　　私達に可能性を与えている。
豊かな自然が私達の味方だ。
子どもの思いと声が生きる“ふるさと”を、
被災地の仲間とともに作っていこう
三陸が日本の理想になる時代を作っていこう。

Taro Town, beneath the great blue sky, surrounded by the ocean of dark blue and mountains of green.

Taro, living with history.
Taro, a place to find comfort.
Taro, it has tested us, and opened doors of possibilities
Taro, its abundance of nature, always our ally

Together with our friends from the tsunami-affected areas, let us make Taro a "hometown," alive with the hearts and voices of children.

Let us make this an age when Sanriku is the ideal Japanese community.



ありがとうございます。

【山崎友子】　それでは村井くんの宣言を、若い方はその気持ちを強く持たれて、大人の方はこれから応援していくという気持ちを確認するということで、再度拍手をお願いいたします。 村井くん、ありがとうございました。

それでは最後に閉会の言葉を、研究チームの西館から行います。

■ 閉会挨拶

西館　数芽（工学部教授）

【西館数芽】　今日は皆さんお集まりくださいまして、ありがとうございました。

これにて会を閉会とさせていただきます。ありがとうございます。

（終了）

岩手大学地域防災研究センター
第６回地域防災フォーラム

未来を築け
被災地に学ぶ、被災した子ども達とともに
～災害文化の醸成・継承・伝播～

講 演 録

発　行：2014年４月21日

編集・発行：岩手大学地域防災研究センター
〒020－8551
岩手県盛岡市上田４－３－５
TEL　019－621－6448
http：//rcrdm.iwate-u.ac.jp

印　　刷：河北印刷株式会社